

# 京都府埋蔵文化財情報

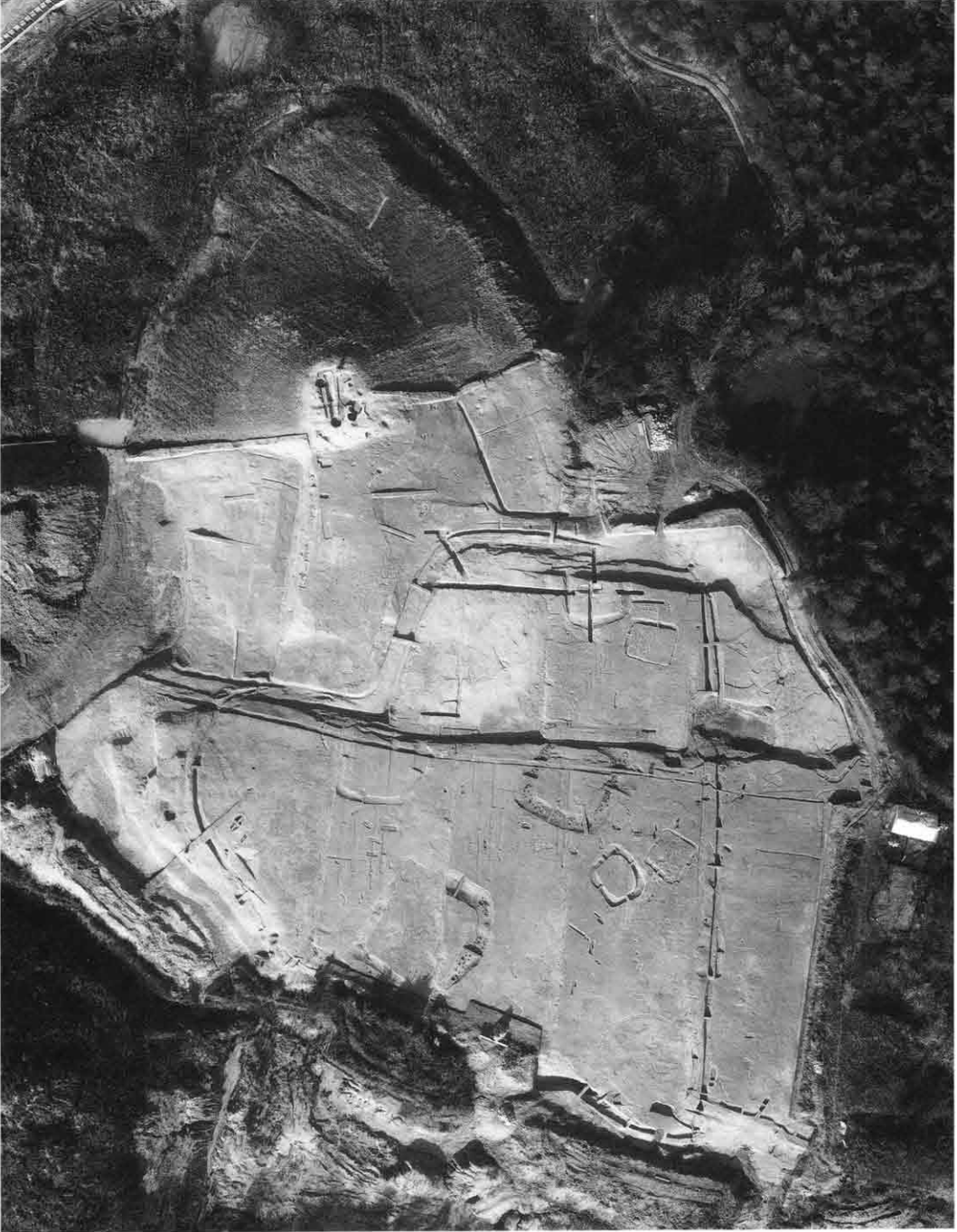
## 第49号

瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査-----	有井 広幸-----	1
長岡京条坊制地割計画の再検討(下)-----	鍋田 勇-----	9
—平成5年度発掘調査略報—-----		22
1. 薬師7号墳	3. 若林遺跡	
2. 神宮谷4号墳	4. 燈籠寺遺跡	
資料紹介 聚楽第跡出土の軒平瓦-----	森島 康雄-----	27
府内遺跡紹介 60. 平野山瓦窯跡-----		34
長岡京跡調査だより・46-----		38
センターの動向-----		41
受贈図書一覧-----		43

1993年9月

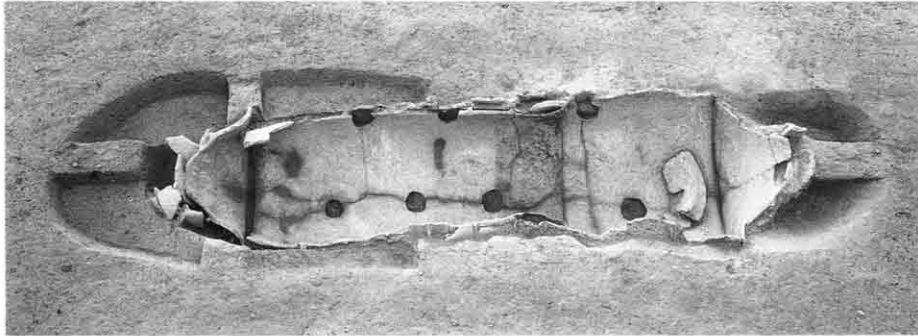
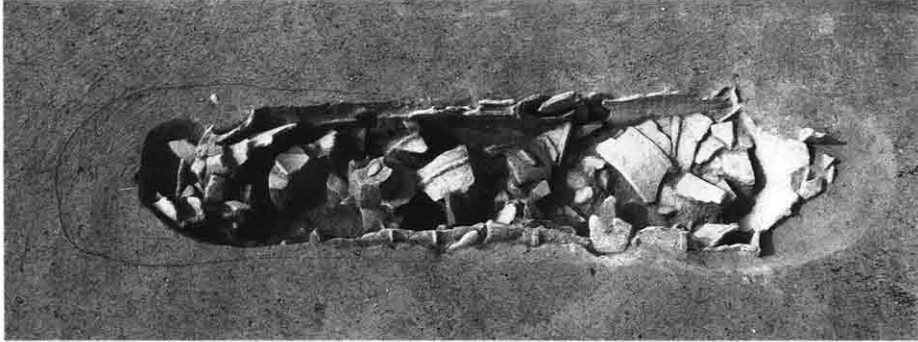
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第1 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

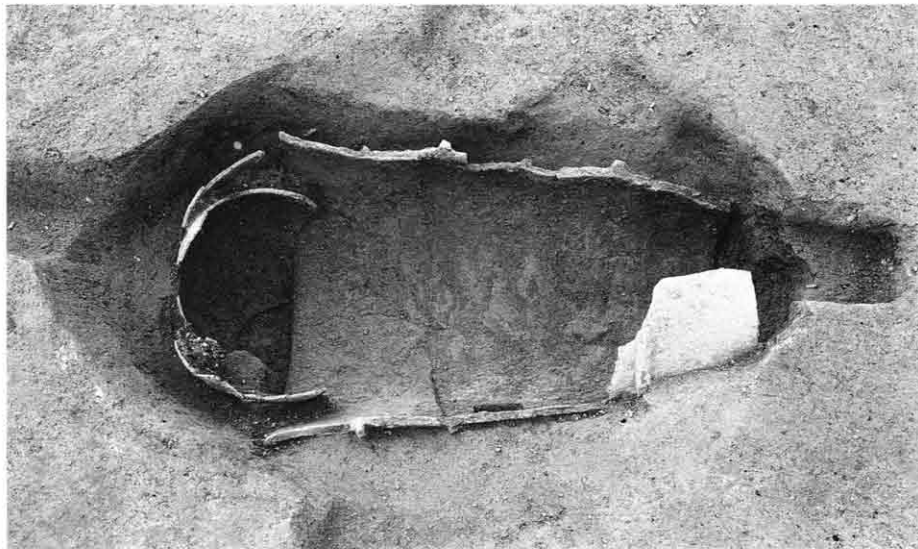


瓦谷遺跡・瓦谷古墳群全景

図版第2 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群



(1)埴輪棺16 出土状況(東から)



(2)埴輪棺23 出土状況(東から)

## 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査

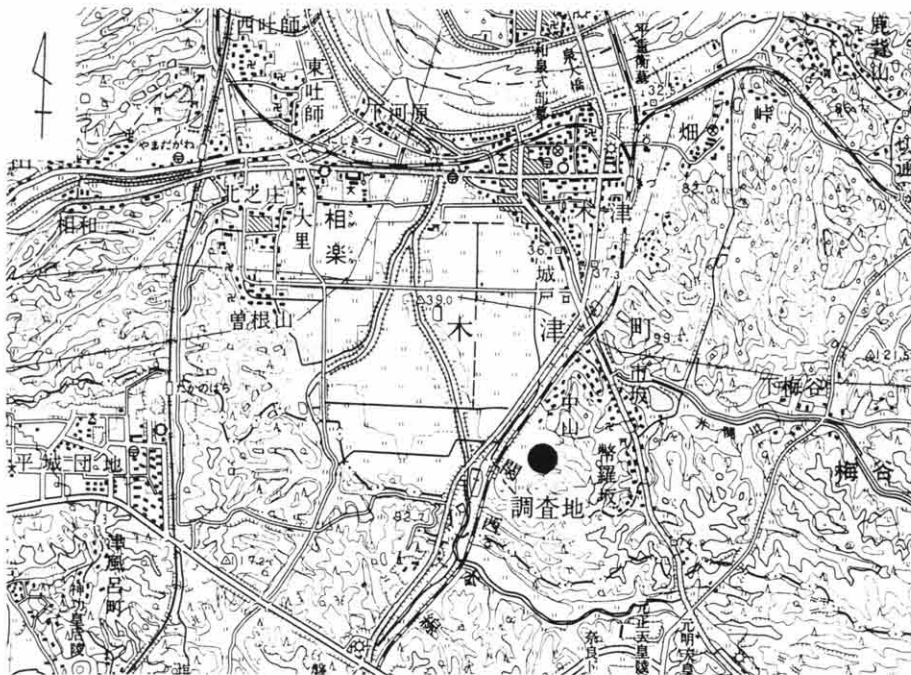
有井 広幸

### 1. はじめに

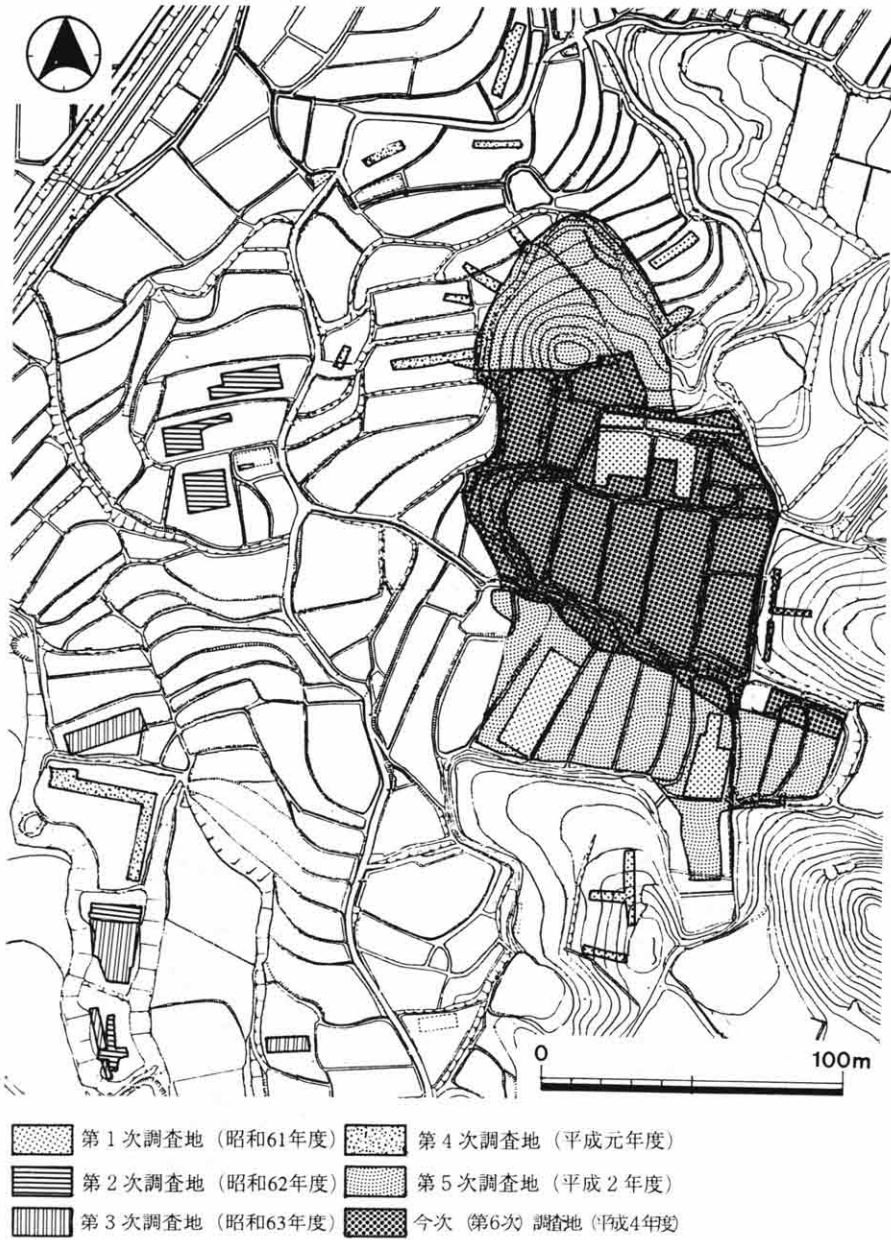
瓦谷遺跡・瓦谷古墳群は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字瓦谷に位置する、古墳時代の遺構を中心として縄文時代から、中世にわたる複合遺跡である。

今回の調査は、関西文化学術研究都市の開発対象地として、住宅・都市整備公団の依頼により当センターが、平成4年7月～平成5年3月にかけて実施した。調査面積は約6,900m<sup>2</sup>である。

当遺跡は、木津町の盆地を東から臨む丘陵とその周辺の谷地形に広がっており、調査は、昭和61年度から数次にわたって分けて行われている。今回は、第6次調査にあたる。平成2年度の調査で2基の主体部を持ち、鉄製甲冑ほかを副葬していた瓦谷古墳(1号墳)の、南に広がる丘陵部全域の調査を実施した。その結果、円墳と考えられていた瓦谷1号墳が



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 トレンチ配置図(1/25,000)

前方後円墳であったことや、円墳1基、方墳8基、多数の埴輪棺・土壙墓などが出土しており、その概要を中心に報告しておきたい。

## 2. 調査概要

今回の調査地は、東から西に向かって盆地方向に張り出している丘陵の先端付近にあたる。現況としてはほとんどの部分が明治以降の新田開発による水田耕作地であった。丘陵斜面を水田にするために、丘陵の尾根筋は階段状にカットされ、斜面下手に盛り土されていた。このため調査地内は削平された部分が多かった。

### ①瓦谷古墳群について

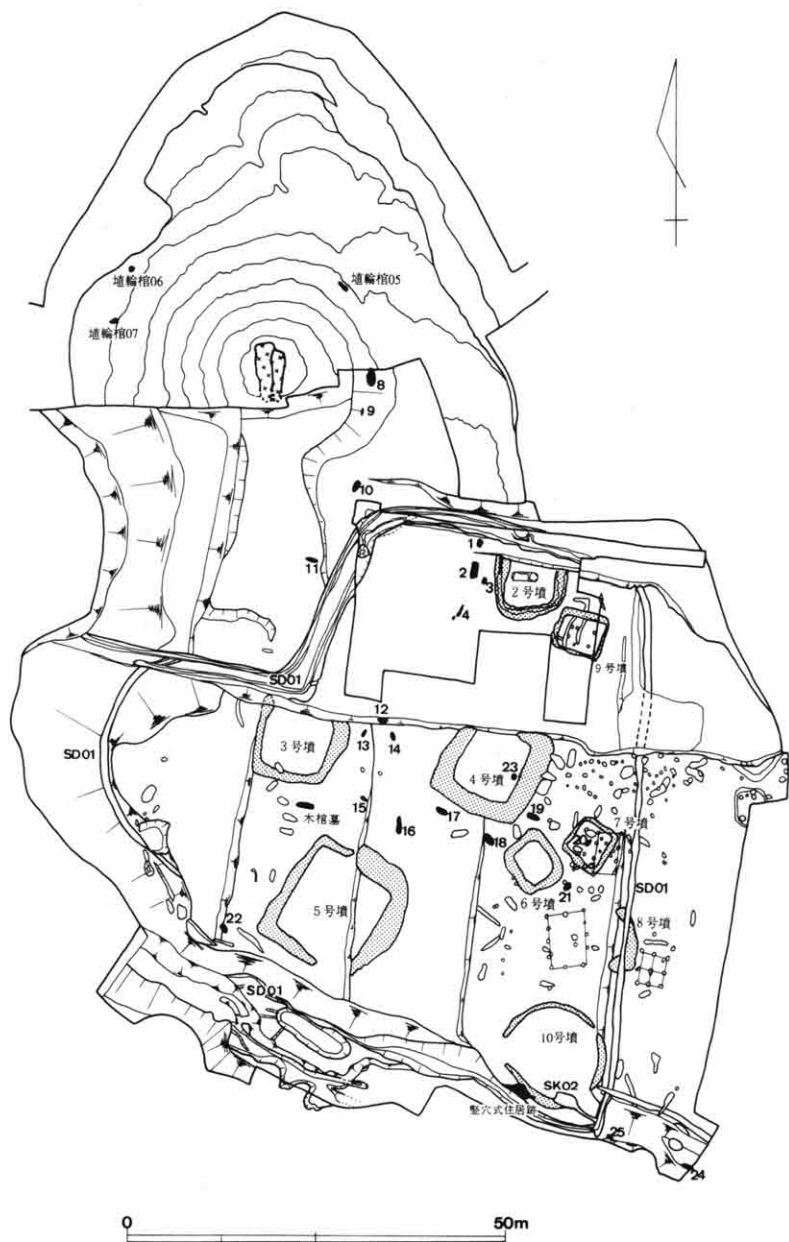
瓦谷古墳群は、当初円墳と考えられていた1号墳の周辺から、削平された古墳が発掘調査によって発見されるにつれ、瓦谷1号墳を中心とする古墳群と認識されるに至った。今回、瓦谷1号墳の残る丘陵をほぼすべて調査できたことにより、この古墳群の内容がかなり明らかとなった。

瓦谷古墳群は、この丘陵上に完結する状態で築造されている。古墳群の構成は、前方後円墳1基、円墳1基、方墳8基、埴輪棺25基、木棺墓1基等からなっている。

瓦谷1号墳は、1990年の調査では、墳丘の限られた部分の調査であったため、直径25～30mの円墳と考えられていたが、今回の調査によって南側に前方部が確認できたことにより、全長約48mの前方後円墳であることが明らかになった。前方部の大半は、後世の削平により残りが悪く、耕作土直下で地山となる。削平の時期は明白ではないが、今回調査した丘陵をめぐる中世頃の溝(S D01)が1号墳の前方部を避けて掘られていることから中世頃までは墳形をとどめていたと考える。また、前方部は南側及び東側で丘陵から切り離されており、自然地形を利用して築造している。前方部の築造時の形状、及び規模について

付表1 古墳群内容表

	形態	規模	埋葬施設	出土遺物
1号墳	前方後円墳	全長48m	木棺直葬・粘土槨	主体部より鏡・漆塗製品。多くの鉄器、墳丘周辺に埴輪棺数基
2号墳	方墳	一辺7.9m	木棺直葬?	埴輪片(周溝)
3号墳	方墳	一辺10m	削平	土師器片
4号墳	方墳	一辺10.5m	削平	須恵器壺(周溝北東隅)
5号墳	方墳	一辺13.9m	削平	長頸壺・高杯(東周溝)、壺(周溝南西隅)
6号墳	方墳	一辺5.5m	削平	壺(南周溝)石鏃(縄文?、墳丘より)
7号墳	方墳	一辺5.2m	中心に埴輪棺	土師器片
8号墳	方墳	一辺7m	削平	家形埴輪(北周溝)
9号墳	方墳	一辺7m	削平	土師器壺埋納土坑、土師器片
10号墳	円墳	径14m	削平	なし



第3図 遺構略図

付表2 埴輪棺内容表

埴輪 棺名	取り上 げ番号	墓壙規模 (m)	棺規模 (m)	本体・棺蓋	小口 部分	つなぎ部 その他	時期	出土 位置	その他
01	SX2002	0.96×0.70 一段墓壙	最大長0.7 幅0.32	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪		Ⅱ期	2号墳 西辺	棺本体と同一の埴 輪を閉塞埴輪に使用一辺10 前後の 埴輪片を枕に利用 墓壙内埋土中から 菅玉1点出土
02	SX2004	2.20×1.0 一段墓壙	最大長1.25 幅0.49	普通円筒埴 輪(複棺)	ヒレ付 き円筒 埴輪	普通円筒 埴輪	Ⅱ期	2号墳 西辺	
03	SX2005	1.60×0.45 一段墓壙	最大長1.35 幅0.25	普通円筒埴 輪(複棺)	有機材 ?		Ⅱ期	2号墳 西辺	
04	SX2007	1.05×0.6 一段墓壙	最大長0.65 幅0.24	普通円筒埴 輪	普通円 筒埴輪		Ⅱ期	2号墳 西辺	本体の埋置に先行 し閉塞埴輪を設置
05		1.64×0.52	残存長1.3 最大幅0.35	棺蓋のみ ヒレ付き円 筒埴輪	盾形埴 輪(I 類)を 含む	普通円筒 を破碎し て隙間を 閉塞	Ⅱ期	1号墳 後円部 北東裾 部	正確な方位不明
06		0.94×0.78	最大長0.76 幅0.37	蓋形埴輪 I 類			Ⅱ期	1号墳 後円部 北西、 墳丘外	正確な方位不明
07				土師器二重 口縁	有機材 ?		Ⅱ期	1号墳 後円部	
08	SX51	2.38×0.88	最大長16.3 幅0.62	ヒレ付き円 筒埴輪	ヒレ付 き円筒 埴輪		Ⅱ期	1号墳 後円部 東、墳 丘裾部	
09	SX50	1.14×0.5	最大長0.7 幅0.38	普通円筒埴 輪			Ⅱ期 ?	1号墳 後円部 東、墳 丘裾部	
10	SX62	1.64×0.93 ~0.6	最大長1.15 幅0.315	ヒレ付き円 筒埴輪	朝顔形 埴輪		Ⅱ期	1号墳 東くび れ付近 墳丘外	
11	SX25	1.70×0.54	最大長1.50 幅0.33	ヒレ付き円 筒埴輪	盾形埴 輪 I 類		Ⅱ期	1号墳 前方部 東	埴輪棺を設置する 以前に、埴輪を粉 砕し、棺の下に敷 きつめている。
12	SX18	1.54×0.4 以上	最大長1.44 幅0.3	ヒレ付き円 筒埴輪			Ⅱ期	3号墳 東辺	



13	SX21	残存長1.03 ×幅0.4	残存長0.6 幅0.27	普通円筒埴 輪(単棺)			Ⅲ期 ?	3号墳 東辺	棺底のみ遺存
14	SX13	残存長1.22 ×幅0.57	残存長1.05 幅0.31	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪		Ⅱ期	3号墳 東辺	棺底のみ遺存
15	SX20	1.31×0.46	残存長0.9 幅0.25	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪		Ⅲ期	5号墳 北辺	棺底のみ遺存
16	SX14	23.5×6.3	最大長1.43 幅0.43	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪			5号墳 北辺	埴輪片を枕に転用
17	SX15	1.50×0.79 二段墓壇	最大長0.71	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪	蓋形埴輪 Ⅰ類	Ⅱ～ Ⅲ期	4号墳 南辺	
18	SX24	1.69×0.84 二段墓壇	残存長1.05 幅0.37	普通円筒埴 輪、盾形 埴輪Ⅱ類 (複棺)	朝顔形 埴輪＋ 盾形埴 輪Ⅱ類		Ⅲ期	4号墳 南辺	拳大の河原石で枕 に転用
19	SX26	1.60×0.69	残存長0.75 幅0.32	普通円筒埴 輪(単棺)			Ⅲ期	4号墳 西辺	細破が多く棺の遺 存状態は悪い
20	SX11	1.14×0.55	最大長0.67 幅0.33	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪 (横位 で使用)		Ⅲ期	7号墳 墳丘内 中央	棺本体の上部(蓋 部)は細片で出土
21	SX12	1.29×0.55	最大長0.74 幅0.3	普通円筒埴 輪(単棺)	朝顔形 埴輪		Ⅱ期	7号墳 南辺	
22	SX22	2.00×0.95	残存長1.20 幅0.45	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪		Ⅲ期	尾根の 南端	小口部の埴輪上部 に鉄斧出土、棺本 体は完形に近い状 態で出土
23	SX23	1.03×0.62	最大長0.63 幅0.43	普通円筒埴 輪(単棺)	土師器 壺(片面 のみふ さぐ)		Ⅲ期	4号墳 墳丘内	棺本体は完形の状 態で出土
24	SX19	2.20×1.35	最大長1.85 幅0.55	盾形埴輪＋ 普通円筒埴 輪	蓋形埴 輪	蓋部に普 通円筒埴 輪ととも に家形埴 輪の細片 出土		尾根の 南端	棺本体は盾面を下 にし、そののち、 一部白色粘土で、 盾形埴輪を固定し ている。本体の埋 置に先行して閉塞 埴輪を設置
25	SX66	1.00×0.58		蓋形埴輪片					埴輪棺ではなく、 墓壇内に埴輪を入 れた可能性あり。 埴輪の下に青灰色 粘質土混礫を敷い ている。

備考. 蓋形埴輪 Ⅰ類 佐紀陵山古墳タイプ 盾形埴輪 Ⅰ類 直弧文(忍ヶ岡系対象文) 時期  
Ⅱ類 その他 Ⅱ類

川西編年

は不明な点が多い。周辺の斜面からは、蓋形・盾形・鱗付円筒形など多数の埴輪が出土している。また、1号墳の周辺で新たに埴輪棺を3基検出した。後円部東斜面で検出した埴輪棺08からは副葬品として2個の白玉が出土した。また、前方部東側の墳丘内にあたる地点で埴輪棺11を検出した。この埴輪棺は、検出時は耕作土直下より出土しているが、墳丘を復原して考えると墳丘上からかなり深い位置になる。1号墳周辺の他の埴輪棺が比較的浅い地点から出土していることから、埴輪棺11は1号墳築造に先んじて造られた可能性もある。

方墳群は、1号墳の南東に広がる丘陵平坦地に築かれていた。各古墳の墳丘は大半が削平されており、主体部が観察できたのは1986年に調査した2号墳のみで、ほかは周溝を確認できた程度である。周溝内からの出土遺物では、4号墳では朝顔形・家形・蓋形埴輪等が出土している。9号墳では、周溝の南西端に土器を埋納した土坑を検出した。土坑内の土師器壺は、正位に据えられ、土師器壺片で蓋をしていた。当初9号墳を竪穴式住居跡と考え、この土坑を胞衣壺と考えたが、周溝の形状等から古墳とそれに伴う土坑と考えることにした。各古墳の主軸方位は4・5号墳が比較的近い方位であるほかは、統一性がない。

円墳は10号墳1基のみで、調査地南端で見つかった。周溝の一部が確認できたのみで埋葬施設などは削平されていた。この古墳の一部はその南側で見つかった方形の竪穴式住居跡S H03によって切られている。

埴輪棺群はこれまでの調査分を含めると25基(今回18基)を確認した。埴輪棺は本来古墳の周囲に立て並べられていたものを転用しており、特製棺は確認していない。各埴輪棺は2～3個体の埴輪を組み合わせて棺としており、一部形象埴輪(蓋・盾など)をつなぎ目や蓋として利用している例が多いほか、埴輪棺18・24のように棺身に盾形埴輪を使用しているものもある。また、埴輪棺23では、片方の小口に土師器壺を蓋として利用していた。埴輪は、1号墳に近い地点では鱗付円筒埴輪を使い、遠ざかるにつれて普通円筒埴輪を使う傾向がある。埴輪の時期も、1号墳から遠ざかるにつれて新しくなる傾向がある。

埴輪棺11・20・23は各古墳の墳丘内部に作られており、各古墳との新旧関係が注目される。先述したように今回の調査では古墳の墳丘の削平が激しく、各古墳と埴輪棺との切りあい関係は確認できないが、各古墳の築造以前に埴輪棺が設けられていた可能性も考えられる。副葬品は、今次調査分では埴輪棺8の白玉以外は、埴輪棺22で鉄斧が掘形から出土しているのみである。

木棺墓は3号墳の南側で検出した。木製の棺を使用したもので、両小口を深く掘り込んで板を固定しており棺底には礫を敷いていた。少量の土師器の破片が出土している。

## ②その他の遺構について

このほか、建物では竪穴式住居跡が10号墳の南で1棟、掘立柱建物跡3棟ある。また、埴輪を含まない土壙墓が10数基あり、遺物が少なく時期決定が困難な例が多いが、奈良時代の土師皿と鉄製品が出土した例や、布目瓦片が出土した例、小型丸底壺が出土した例もあり、複数時代にわたると考えられる。

中世の時期の遺構では、溝及び土壙がある。

調査地を鉢巻状にめぐる溝SD01は、各部分で規模がかなり変化する。南側では幅約4m・深さ約2.5mに達し、この溝を堀と考えれば丘陵上に城館があった可能性もある。

4号墳の東側の土壙では焼土壁を持ち、内部に炭や灰がつまり、土師器の皿と鉄製品が出土した。遺構の周辺部で出土している鉄滓との関連が考えられる。

## 3. まとめ

今回の調査によって瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の全望が明らかになった。瓦谷古墳群は、前方後円墳を中心に、円墳・方墳・埴輪棺等で構成され、当時の階層構成が確認できる貴重な遺跡と考えている。古墳群の造営時期は、出土した埴輪などの遺物から4世紀後半で、瓦谷1号墳の造営後短期間で順次作られている。出土した埴輪は円筒・朝顔形埴輪のほか、蓋・盾・家などの形象埴輪が出土している。特に盾形埴輪は鋸歯文・直弧文をそれぞれ施したものと、特殊なタイプのもの3種類が出土しており、この時期の埴輪を考えるうえで良好な資料と言えよう。

他の時期についても、縄文時代の遺構もあり、中世の城館の可能性もある遺構もあり、この遺跡の多様な性格が明らかとなった。

(ありい・ひろゆき＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 石井清司・伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

## 長岡京条坊制地割計画の再検討(下)

鍋 田 勇

### (2)東西路

a. 大路 東西路についても、南北路と同様に、京の骨格を形成する大路(一部条間小路を含む)の検討から行う。

付表3は、北京極大路から四条大路までの大路及び条間小路について、検出された条坊側溝と両側溝心間(路心)の位置を国土座標で表示したものである。南北路と異なり、東西路では、条路の基準線をにわか決定しがたいため、各大路間の距離を算出し、基準を求める方法をとる。この表から、各大路間の距離を路心間で算出すると、861~959尺と幅が認められるものの、三条条間小路-三条大路-四条条間小路間がそれぞれ900尺に近く、

付表3 東西大路間の距離

No.	条路名	国土座標 x=	大路間の距離			
1	北京極大路	北側溝	-116,470.00			
		路心	-116,474.50			
3	北一条大路	—				
5	一条条間大路	路心	(-116,997.10)			
7	一条大路	路心	-117,268.55			
9	二条条間大路	路心	-117,528.45			
11	二条大路	路心	-117,783.26			
13	三条条間小路	路心	-118,067.00			
15	三条大路	路心	-118,332.70			
17	四条条間小路	路心	-118,600.02			
19	四条大路	路心	-118,873.18			

※路心の値は、付表4参照

付表4 東西路検出側溝一覽表

No.	条路名	検出側溝	国土座標 x=	計画位置	誤差		文献
1	北京極大路 30.4尺	北 SD15401	-116,470.00	-116,468.70	+1.3m	4.4尺	20
		南 SD15402	-116,474.50 -116,479.00		+5.8m	19.6尺	
2	北一条条間南小路 49.7尺	北 SD04101	-116,596.20	-116,601.90	+1.7m	5.6尺	21
		南 SD11711	-116,603.55 -116,610.90				22
3	北一条大路	北 SD146202	-116,720.00	-116,735.10			23
		南					
4	一条条間北小路 28.0尺	北 SD08	-116,867.42	-116,868.30	-0.9m	3.0尺	24
		南 SD07	-116,871.56 -116,875.70		+3.3m	11.0尺	24
5	一条条間大路 (98.7尺)	北 (SD06)	(-116,982.49)	-117,001.50	(-4.4m)	(14.9尺)	24
		南 SD21401	(-116,997.10) -117,011.70				25
6	一条条間南小路 19.8尺	北 SD24903	-117,132.40	-117,134.70	+0.6m	2.1尺	26
		南 SD24906	-117,135.33 -117,138.25				
7	一条大路 76.0尺	北 SD11805	-117,257.30	-117,267.90	+0.7m	2.2尺	27
		南 SD11806	-117,268.55 -117,279.80				
8	二条条間北小路 31.4尺	北 SD13949	-117,387.00	-117,401.10	-9.5m	31.9尺	28
		南 SD13914	-117,391.65 -117,396.30				
9	二条条間大路 84.8尺	北 SD15922	-117,515.90	-117,534.30	-5.8m	19.8尺	29
		南 SD15905	-117,528.45 -117,541.00				
10	二条条間南小路	北 SD08203	-117,647.50	-117,667.50			30
		南					
11	二条大路 134.4尺	北 SD298901	-117,761.35	-117,800.70	-17.4m	58.9尺	31
		南 SD298701	-117,783.26 -117,805.10				
12	三三条間北小路 26.8尺	北 SD16333	-117,931.46	-117,933.90	+1.5m	5.2尺	32
		南 SD16330	-117,935.43 -117,939.40				
13	三三条間小路 30.4尺	北 SD19603	-118,062.25	-118,067.10	-0.2m	0.8尺	6
		南 SD19604	-118,066.88 -118,071.50				
14	三三条間南小路 45.3尺	北 SD15128	-118,193.20	-118,200.30	-0.4m	1.4尺	33
		南 SD15144	-118,199.90 -118,206.60				
15	三条大路 85.1尺	北 SD18600	-118,320.10	-118,333.50	-0.8m	2.7尺	34
		南 SD18605	-118,332.70 -118,345.30				

長岡京条坊制地割計画の再検討(下)

No.	条路名	検出側溝	国土座標 x=	計画位置	誤差		文献
16	四条条間北小路 19.9尺	北	SD08355 -118,466.20 -118,469.10	-118,466.70	-0.5m +2.4m	1.7尺 8.1尺	35
		南	SD08365 -118,472.00				
17	四条条間小路 52.0尺	北	SD00252 -118,592.30 -118,600.00	-118,599.90	+0.1m	0.3尺	36
		南	SD00254 -118,607.70				
18	四条条間南小路 28.5尺	北	SD00926 -118,727.43 -118,731.66	-118,733.10	-1.4m	4.9尺	37
		南	SD00927 -118,735.88				
19	四条大路 81.7尺	北	SD25816 -118,861.09 -118,873.18	-118,866.30	+6.9m	23.2尺	38
		南	SD27301 -118,885.26				
20	五条条間北小路 30.7尺	北	SD10601 -118,996.20 -119,000.65	-118,999.50	+1.1m	3.9尺	40
		南	SD10602 -119,005.10				
21	五条条間小路	北		-119,132.70			
		南	SD12516 -119,144.20				41
22	五条条間南小路 29.8尺	北	SD22853 -119,271.84 -119,276.25	-119,265.90	+10.3m	34.9尺	42
		南	SD22895 -119,280.65				
23	五条大路 84.4尺	北	SD23550 -119,403.85 -119,416.34	-119,399.10	+17.2m	58.2尺	43
		南	SD23548 -119,428.83				
25	六条条間小路 30.2尺	北	SD21605 -119,684.30 -119,688.78	-119,665.50	+23.3m	78.6尺	44
		南	SD21627 -119,693.25				
26	六条条間南小路 30.9尺	北	SD34401 -119,824.60 -119,829.18	-119,798.70	+30.5m	103尺	45
		南	SD34402 -119,833.75				
27	六条大路 82.8尺	北	SD21033 -119,955.40 -119,967.65	-119,931.90	+35.8m	121尺	46
		南	SD21038 -119,979.90				
28	七条条間北小路 29.7尺	北	SD33923 -120,098.40 -120,102.80	-120,065.10	+37.7m	127尺	47
		南	SD33910 -120,107.20				
29	七条条間小路 33.1尺	北	SD251 . . -120,232.70 -120,237.60	-120,198.30	+39.3m	133尺	48
		南	SD251 . . -120,242.50				
31	七条大路	北	SD07005 -120,487.74	-120,464.70			49
		南					

\*誤差の+は計画位置から南へ、-は北へのずれを表す

特に三条大路の路心を少し南へ下げるとともにほぼ900尺となることがわかる。さらにより離れた路面間をみると、北京極北側溝から一条大路路心まで約2700尺、一条大路路心から三条大路路心まで約3600尺であり、完数値とみなすことができる。

以上の結果から、北京極大路・一条大路・三条大路については、南北路と同じく、一坊を1800尺の均等計画線によって配置する平城京型の設計方法に基づく地割が行われたと考えられる。また、三条及び四条条間小路においても平城京型による配置を指摘しうる。

付表4は、三条大路の路心をやや南側へ下げた位置を東西路の仮基準(X=-118, 333.50)として各条路の計画線(注12)を設定し、検出側溝との誤差を算出したものである。この表をもとに、平城京型復原による問題点を改めて整理すると、大路について、①二条大路のずれ、②宮城に面する条間大路のずれ、③従来から指摘されている四条大路以南の大幅なずれ、のあることが判明する。

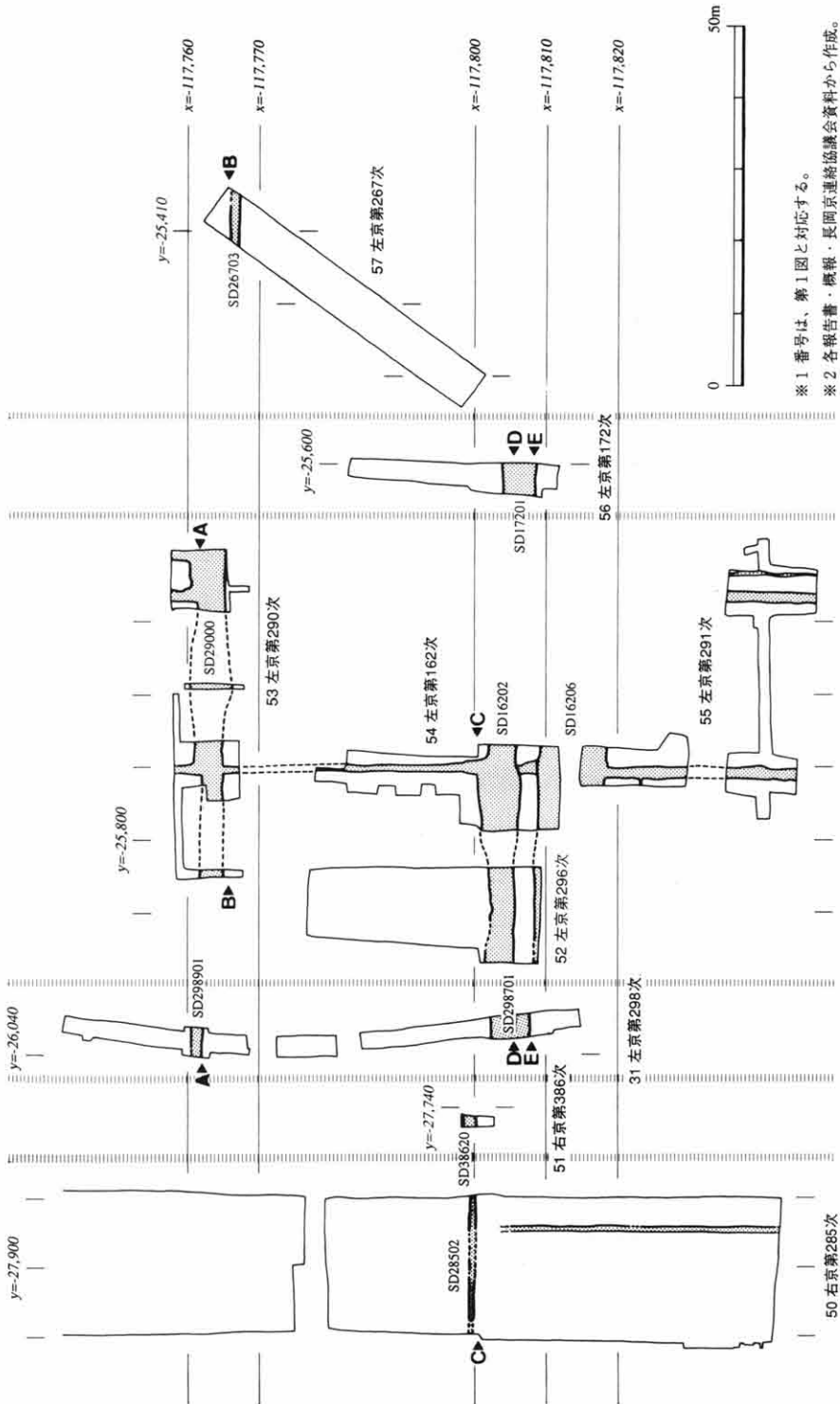
①については、次項で述べるように計画線に基づいた地割であると考えられる。しかし、従来の復原案を二町北へずらし、「二条条間小路」を二条大路へと変更するのに伴い、二条大路の推定ラインが、朝堂院と近接するという新たな問題も生じている(注13)。また、②については、二条条間大路の路心が、大極殿の中軸線とほぼ一致するにもかかわらず、これが東西条路の基準線とされていないことがわかる。これらの問題については、別稿にて改めて検討を行いたい(補注1)。

③については、明らかに平城京型では説明不可能である。この点に対しては、今回の作業でも明確な解釈を得るには至らなかった。

b. 北京極大路と二条大路 長岡京の北辺坊は、長岡宮第154次調査で北京極大路の南北両側溝が検出されたことや、いわゆる北辺官衙北部で建物跡等が確認されたこと(注14)で、その存在が確定したといえる。しかし、北京極大路については検出された路面幅が約30尺と小路規格であるため、まだ不確定な要素も残されている。ここでは、北京極大路の北側溝が計画線上に位置すること、すなわち、北京極大路が計画線から南側へ、つまり宮城側へ道路面をとる方法が採用されたことのみを確認するにとどめる。

次に二条大路について検討する。二条大路は、近年調査例が増加し、松崎俊郎氏によって関連データが公表された(注15)。第2図は、同氏の発表資料と同じ方法により、二条大路の検出調査地を集成したものである。

左京では、南北両側溝が検出されているが、右京では南側溝のみである。図から、検出した条坊側溝の位置及び形状に大きな差が認められ、他の大路とは様相が異なっている。特に左京第162・291・296次調査で検出された南側溝は、前・後期の二度にわたり、側溝が掘削され、南側の前期側溝で幅約10m、北側の後期側溝で幅約6mを測る大規模なもので



第2図 二条大路検出調査地集成図



ある。しかし、報文でも指摘されているように、前期側溝は長岡京期直前まで流れていた自然流路 S D 16213 を利用・改修したものと考えられること、西側約 240m 離れた左京 298 次調査や東側約 200m の左京 172 次調査では、前・後期の 2 時期にわたる側溝が認められないことなどから、この地区のみ旧地形に制約された特殊な条坊の施工が行われたと考えられる。これらの左京域で検出された南側溝間にはそれぞれ規則性の認めにくい状況にあるが、共通性も指摘できる。1) 自然流路を利用した前期側溝 S D 16206 の北肩は、S D 298701、S D 17201 の南肩の位置に近接する。2) 後期側溝 S D 16202 の南肩は、S D 298701、S D 17201 の側溝に近い。前期側溝 S D 16206 が、旧流路を利用したものであれば、この位置が計画線から求められる側溝の本来の位置からずれている可能性が高い。この点は、他の側溝がすべてこれよりも北側に位置していることから肯定できよう。さらに、S D 16206 が、S D 298701 及び S D 17201 と接続する場合、南北路との交差点を利用してずらすか、もしくはクランク状の接続を行わなければならない。この時、S D 16206 の北肩ラインを両者の南肩ラインとすることで同一の基準線によって(基準線 E)、施工可能である。次に後期側溝 S D 16202 は、すでに存在する両側の溝と南肩をそろえることなく、両側溝心(基準線 D)を南肩とし、北側にずらした位置で掘削を行っている。また、この時、S D 16202 の北肩は、右京域の南側溝に近似する(基準線 C)。

以上の整理から、複雑な様相を呈する南側溝も 3 本の基準線で施工可能であることがわかる。このうち、施工当初に使用された基準線は、基準線 C・E であるが、右京域で検出した側溝との関連から、基準線 C が南側溝掘削の本来の基準線であったと考えられる。ところで、基準線 C の国土座標は、 $X=-117,801$  付近に求められるが、大路の計画線との関連をみると、三条大路の路心を仮基準( $X=-118,333.50$  とする)とすれば、二条大路の計画線(1800 尺北側)は、 $X=-117,800.70$  となり、ほぼ基準線 C の値となる。

北側溝では、S D 298901 の南肩と S D 29000 の西部北肩を結ぶライン(基準線 A)、及び S D 29000 の南肩と S D 26703 の北肩を結ぶライン(基準線 B)を設定することにより、三者の位置関係につながりをもたせることが可能となる。この時、A-C 間、B-C 間は、それぞれ約 129 尺、約 117 尺となる。前者の 129 尺は、平城京の二条大路側溝心間 105 大尺(126 尺)に極めて近似した値となっている。したがって、長岡京における二条大路は、条坊計画線(基準線 C)に南側溝をあて、路面を北側、つまり宮城側から割く方法がとられたといえ、側溝心間距離は平城京と同規模で計画されたことが判明する。

また、北京極大路とともに二条大路が計画線から宮城側へ路面を確保するのであれば、東西一坊大路とあわせ、宮城を画する大路すべてにこの方法が採られていることになり、この点からも整合性を見いだすことが可能であろう。

c. 小路の地割と宅地 付表5は、付表4に基づいて一町の南北宅地幅を算出したものである(数値は、宅地の南北を画する東西路間の側溝心間距離を示し、築地等の施設も含む)。この表及び付表4から小路の地割と各条内の宅地幅を検討する。

まず、検出された小路の路心と計画線との関係を見ると、五条条間北小路以北の小路は、原則として計画線を路心とする平城京型であることがわかる(一条条間北小路・四条条間北小路は、計画線を北側溝とする。)。したがって、東西路では、南北路で認められる段階的计划線は採用されておらず、長岡京では、南北路と東西路の地割方法が異なっている点に大きな特徴を見いだすことができる。

次に、路面幅をみると、側溝心間距離で20尺、30尺、50尺の3種類の規格が認められる。この点も南北路とは異なる特徴である。しかし、これらの規格が規則的に配置された状況はみられないため、通常は30尺の規格が採用され、例外的に他の規格が使用されたと考えられる。

さらに上記の2点に関連する宅地幅を検証する。宅地の幅は、路面の地割、具体的には施工位置と路面幅によって規定される。すべての大路幅を84尺(70大尺、次項参照)、小路幅を30尺とし、平城京型の施工方法を忠実に実施した場合、大路に面する宅地幅(一町・四町、他の町は左記に代表させる。以下、同じ。)は393尺、条間小路に面する宅地幅(二町・三町)は420尺と計算される。また二条以北では、大路・小路が交互に配置されるため、すべての宅地幅が393尺となる。しかし、付表4・5からも明らかなように、実際には路面幅が異なっていたり、計画線からのずれがあるため計算値とは大きく異なっている。さらに各宅地幅には最大で80尺以上もの差が認められ、必ずしもすべての宅地幅を均一にしようとした意図は窺われない。この点においても南北路とは際違った違いを示している。

さて、以下では検出例に基づいて具体的に検証を進める。

まず、二条以北であるが、前述したように二条大路が計画線を南側溝とし、北(宮城)側へ路面を確保する。二条大路は、宮城南

付表5 南北一町幅

条	町	条路名		
北	辺	北京極大路		
		396尺		
		北一条条間南		
		369尺		
一	条	北一条大路		
		(414尺)		
		一条条間北		
		(361尺)		
		一条条間大路		
		408尺		
		一条条間南		
		402尺		
		一条大路		
		二	条	362尺
二条条間北				
404尺				
二条条間大路				
360尺				
二条条間南				
(355尺)				
二条大路				
三	条			427尺
				三三条間北
		415尺		
		三三条間小路		
		411尺		
四	条	三三条間南		
		383尺		
		三三条大路		
		四	条	408尺
				四四条間北
406尺				
四四条間小路				
五	条	404尺		
		四四条間南		
		423尺		
		四条大路		
		六	条	375尺
五五条間北				
(440尺)				
五五条間小路				
431尺				
七	条	五五条間南		
		416尺		
		五条大路		
		六	条	—
				六六条間北
—				
六六条間小路				
七	条	444尺		
		六六条間南		
		411尺		
		六条大路		
七	条	400尺		
		七七条間北		
		424尺		
		七七条間小路		

\*付表4に基づき算出

面道路として東西の基幹道路と位置づけられ、東西路のなかではいち早く施工されたことが予想されるが、この変則的な地割によってその周辺地域に影響を与えている。特に二条内の条間大路・小路は、いずれも計画線より北側へ路心を移し、二条大路の直接の影響を受けて狭くなる二条四町の宅地幅を確保したと考えられる。そのため、二条内の宅地は、二町を除き計算値(393尺)よりもかなり狭い。計画線よりも大幅に北側へのずれを示す道路が二条に集中する(二条条間南小路は、北側溝のみの検出であるが、路面幅を30尺と仮定して路心を求めると、計画線から北へ15.6m(53尺)ずれる)のは以上の解釈によって説明可能であろう。

一条内では、一条条間大路北側溝及び北一条大路南側溝が確定していないため各町を正確に比較できないが、三・四町が近似した宅地幅であり原則に近い。ただし、一条条間南小路及び一条大路の路面幅が通常より狭いため、計算値よりやや広い幅をもつ。

三条では、二条大路が計画線から北側へ路面を確保するため一町の幅が広いが、他の町は比較的計算値に近いと考えられる。

四条では、一～三町の宅地幅がほぼ等しく確保されている。これは、四条条間小路が小路としては最も大きな規格を有すること、及び四条条間北小路が計画線を北側溝とし、南側へ路面を確保した結果と考えられる。東西路のなかでは、唯一宅地幅を均一化しようとした意図の窺える地区と評価できる。しかし、四町は四条大路が南へずれているために通常よりも広い幅を有する。

四条大路以南では、五条条間北小路がほぼ計画線上に位置しており、四条大路を例外とすれば、あるいはここまで当初の平城京型による地割が行われたと解釈できるかもしれない。四条大路は、旧小畑川が西流する位置に近いと、地形の制約を受けて計画線よりも南へ下げて地割が行われた可能性が考えられる。

五条条間小路以南では、すでに記したように平城京型では説明できない。ただし、一町の宅地幅に限定してみると、大路に面する宅地の幅が条間小路に面する宅地の幅よりも狭くなるという関係が認められ、その意味では平城京型と共通する特徴を有している。

### (3) 大路の規格

これまでに、大路の両側溝の判明しているものは、南北路では、東三坊大路(83.4尺)、東二坊大路(80.6尺)、東一坊大路(83.5尺)、西一坊大路(45.3尺)、東西路では、北京極大路(30.4尺)、一条大路(76.0尺)、二条条間大路(84.8尺)、三条大路(85.1尺)、四条大路(81.7尺)、五条大路(84.4尺)、六条大路(82.4尺)である。これらのうち、西二坊大路・北京極大路は明らかに規格が異なっているが、その他の大路については、従来側溝心間が80尺と考えられていた。しかし、すでに記したように二条大路が平城京と同規格であり、

小尺に換算すると、必ずしもきりのいい数値にはなっていない。そこで改めて大路の規格を検討しておきたい。

80尺前後の大路の平均値を計算すると、82.6尺となるが、数値の分布状況を見ると、84尺にその中心を求めることができる。84尺は、大尺換算すると70大尺となり、これは平城京の宮城東西大路の規格と一致する<sup>(注19)</sup>。また、平安京と比較すれば、一条大路の76尺は平安京宮城東西大路と、東二坊大路の80尺は平安京の大路と一致する。なお、東二坊大路は、東一坊・三坊大路の施工後に造られたものであり、この時に採用された80尺の幅は、小尺では半端な数となる70大尺(84小尺)をきりのいい数値へと変更したものと解釈できる。

長岡京では、南北路・東西路とも大路については平城京型の均等計画線に基づく配置がなされるが、大路幅についても平城京で使用された規格を踏襲する等、まさに伝統の規制力がみられる一方、他方では新たな規格が創出され、平安京へと継承されたといえよう。

### 3. 長岡京条坊制地割計画の復原

前節の検討をまとめ、長岡京の条坊制地割計画を以下のように復原する。

①長岡京の条坊は、平城京と同じく、一坊(条)を1800尺(1500大尺)、一町を450尺(375大尺)とする均等計画線に基づいて地割を行うのを原則とする。

②宮城を画する大路は、すべて計画線から宮城側へ路面を確保する。

③南北路では、東二坊大路を除く大路のみ原則に従い、その他は、段階的な計画線に基づいた地割が行われ、同一坊内での一町幅を等しくする長岡京独自の方法が採用される。

④東西路では、五条条間小路以南を除き、おおむね原則に従った地割が行われる。

⑤大路の規格は、側溝心間で、二条大路(126尺=105大尺)及び通常の大路(84尺=70大尺)に、平城京と同一の規格が認められる。また、東二坊大路(80尺)及び一条大路(76尺)の規格は、平安京の大路規格へと継承される。

長岡京の条坊制は、平城京型を多く踏襲しながら、独自の方法も採用されるなど、実質的には平城京とも平安京とも異なる条坊制である。その意味では、上記の特徴を総合して「長岡京型」と呼称することができよう。しかし、大局的にみれば平安京との隔たりは大きく、したがって、集積型が長岡京で採用されたとする山中氏の説には賛同できない。

小稿での検討を通じて、長岡京における条坊制の最大の特徴として南北路と東西路の地割方法が異なっている事実を明らかにすることができたと考えている。その理由については明確な解釈を示すことができないが、新たに採用された南北路の地割方法が宅地の均一化を指向したものであり、その完成された姿を平安京に求めるとするならば、上記「長岡京型」こそ、平城京型と平安京型の過渡期の地割形態として位置づけるにふさわしい。何

となれば、段階的計画線による地割は、あくまで平城京型の枠内において宅地の均一化を目指したものであること、そしてその方法の中に集積型を可能とする発想が内包されているためである。段階的計画線は、両端が条坊側溝で規定されることによって求められるが、この方法を発展させるならば、一方を規定した後、次の計画線を決定するという方法が考えられる。南北路を例にとれば、大路を規定する1800尺の均等計画線を取り払い、朱雀大路を配置した後、その側溝を新たな基準線とし、必要幅を確保して次の側溝の位置を決定する。このように、中心から順次計画線を決定することにより、はじめて集積型による条坊制が可能となる。換言すれば、平安京の集積型は、平城京を規定した均等計画線のうち、長岡京で小路の、平安京に至って小路・大路の均等計画線が取り払われることによって完成をみたといえ、これら三者の変遷過程を段階的な発展過程として認識することが可能であろう。

#### 4. おわりに

今回の検討でもなお解決しえなかった最大の問題に京南部での東西路のずれがある。この点は、今後の課題とせざるを得ないが、これをもって平城京型に対する批判とするよりも、積極的評価としてむしろ当初の計画が貫徹されなかったことに意義を求めるべきであると考えている。最後にこの観点からずれに対する見解を記しておきたい。

第一に施工時期の問題があげられる。長岡京では、文献史学の立場から、宮城の造営が前期・後期の大きく二時期に区分されることが明らかにされているが<sup>(注21)</sup>、京城についてはその進捗状況が明らかではない。各東西路の施工時期差を考古学的に実証することは容易ではないが、東西路のずれは四条大路を例外とすれば五条条間小路以南で順次拡大する傾向にあるため、この南北で東西路を区分することは可能である。したがって、基幹道路として二条大路がまず施工され、それよりも南の京城では北側から順次施工が行われたと想定するならば、宮城と同様にこれら東西路の施工時期についても大きく二時期に区分されるのではないかと考えられる。

ところで、均等計画線によって配置される最も南側の東西路である五条条間北小路は、長岡京の後期には北側溝が埋め戻され、それまでの路面が宅地として利用されている<sup>(注22)</sup>。この際、路面は従来の南側溝を北側溝として新たに南側へ付け替えられた可能性が高い<sup>(注23)</sup>。その理由は不明だが、すでに施工済みの路面を後期段階に南へずらして施工し直したのであれば、その位置関係から上記の問題を考える上できわめて注目される事例と言えよう。

第二の意義として、均等計画線との関係があげられる。これら東西路のずれは、取りも直さず当初の原則であるはずの均等計画線による地割が守られていないことを意味する。

前節で記したように、集積型の成立に当たっては、小路・大路の均等計画線が取り払われることが必要であるが、ずれがいかなる理由で起こったにせよ、結果的に長岡京において、(おそらくは後期段階に)均等計画線の形骸化をすでに招いていたことが集積型を成立させるもうひとつの要因となったのではないだろうか。

\*                     \*                     \*                     \*

中山修一先生のもと開始された長岡京の発掘調査は、今年1000次を越える回数を記録した。現状の発掘調査が開発と保存の矛盾する問題を包含しているとはいえ、長岡京跡の解明がこれらの調査成果によって進展してきたことは否めない。また、調査成果が公表・活用されてこそ埋蔵文化財への理解が深められることも言うまでもない。小稿は、長岡京の研究に多くの業績をもつ向日市教育委員会山中 章氏の集成された条坊データを手掛かりに検討を行ったもので、山中氏をはじめ多くの方々から貴重なご意見・ご批判を賜るとともに、事実確認や図面作成にご協力を得た。記して厚く感謝したい(敬称略、順不同)。

清水みき・秋山浩三・國下多美樹・松崎俊郎・中塚 良・中尾秀正・山本輝雄・岩崎 誠・小田桐淳  
木村泰彦・原 秀樹・中島皆夫・長宗繁一・木下保明・平良泰久・石尾政信・岩松 保・中川和哉  
土橋 誠・磯野浩光・森下 衛・大崎哲人・森 正・石崎善久・大崎康文・河合弥生

(なべた・いさむ=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注12 従来の平城京型による東西路の条坊計画線は、第二次内裏の中心線を基準線とするため(山中章「長岡京の建築遺構と宅地の配置」『長岡京古文化論叢』1986参照)、小稿の計画線は、従来よりも2.2m北へ上がっている。

注13 長岡宮跡第267次調査では、朝堂院の南西に近い二条大路の推定路面上で礎石建物が検出され、この調査地一帯では、二条大路が施工されていなかった可能性が指摘されている(「長岡宮跡第267次発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集 1993)。

注14 北辺官衙については、國下多美樹「北辺官衙の様相」(「長岡宮跡第231次発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第32集 1991)参照。

注15 松崎俊郎「長岡京跡左京二条条間大路の発掘調査-二条大路をめぐる-」(『近年の都城の調査成果から』第69回研修会資料 京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注16 「長岡京跡左京第162次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集) 1989

「長岡京跡左京第172次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集) 1989

「長岡京跡左京第290次発掘調査略報」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集) 1993

「長岡京跡左京第291次」(長岡京連絡協議会資料No.92-06) 1992

「長岡京跡左京第296次」(長岡京連絡協議会資料No.92-08) 1992

注17 「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊 (財)京都

府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

「右京第386次調査概報」(『長岡京市埋文センター年報平成3年度』) 1993

注18 北一条大路は、現状ではS D1460202を北側溝と判断しているが、計画線を路心として路面幅を求めると約100尺となり通常大路幅と異なる。また、通常大路幅と仮定した場合、計画線よりも北へ約2.7m(9尺)ずれる。いずれにせよ問題点が多く、今後の検出例により判断したい。

注19 注9と同じ

注20 現状では、東西路がずれた要因として条里地割の影響を受けたとする百瀬ちどり氏の説(注7百瀬論文)が最も説得力を有するものと判断するが、条里の施工が長岡京期以前に遡ることが実証されていないため、今後の課題としておきたい。ただし、南北路はすでにみたように条里地割とは関係せず、また、東西路についても五条条間小路以南に限定して条里の影響を受けた可能性があると考え。

注21 清水みき「長岡京造営論-二つの画期をめぐって」(『ヒストリア』第110号) 1986

注22 「長岡京跡左京第106次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第17集) 1985

山中氏は、S D10601・10602を五条条間北小路の両側溝ではありえないとする(注3下段論文)、検出状況から、報文の解釈どおり前期段階の両側溝と考える。

注23 左京第6次調査地の北端で検出された東西溝(『日本専売公社工業用地内埋蔵文化財調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1977)を、後期の五条条間北小路南側溝と考える。この溝が条坊側溝である可能性は、藤田さかえ・百瀬ちどり両氏によって指摘されている(注7論文)。

補注1 宮城周辺の問題については、脱稿後に山中 章氏の「長岡宮城南面と北辺の造営」(『条里制研究』第8号 1992)を拝読し、新たな知見を得たが、小稿では触れることができなかった。

[文献] (略称 埋文=埋蔵文化財 教委=教育委員会 向日市報告書=向日市埋蔵文化財調査報告書

向日市セ=(財)向日市埋蔵文化財センター 京都府セ=(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

20 「長岡宮跡第154次発掘調査概要」(『向日市報告書』第22集 向日市教委) 1988

21 左京第41次調査(未報告)

22 「長岡宮跡第117次発掘調査概要」(『向日市報告書』第10集 向日市教委) 1983

23 「長岡京跡左京第146次発掘調査・戊亥遺跡第2次調査現地説明会資料」(向日市教委) 1986

24 「長岡京跡・中久世・鶏冠井・石田・戊亥遺跡」(『昭和58年度京都市埋文概要』(財)京都市埋文研) 1984

25 「長岡宮跡第214次発掘調査概要」(『向日市報告書』第29集 向日市教委・向日市セ) 1990

26 「長岡宮跡第249次発掘調査概要」(『向日市報告書』第31集 向日市教委・向日市セ) 1991

27 「長岡京跡左京第118次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第15冊 京都府セ) 1985

28 「長岡京左京一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度京都市埋文調査概要』(財)京都市埋文研) 1988

29 「長岡京跡左京第159次発掘調査概要」(『向日市報告書』第27集 向日市教委・向日市セ) 1989

30 「長岡京跡左京第82次発掘調査概要」(『向日市報告書』第10集 向日市教委) 1983

31 注15と同じ

- 32 「長岡京跡左京第163次発掘調査概要」(『向日市報告書』第27集 向日市教委・向日市七) 1989  
 33 「長岡京跡左京第151次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 京都府七) 1987  
 34 左京第186次調査 『向日市報告書』第37集に掲載予定  
 35 「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第9冊 京都府七) 1984  
 36 「長岡京跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教委) 1978  
 37 『長岡京跡発掘調査報告』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告-II』 (財)京都市埋文研) 1977  
 38 「長岡京跡左京第240・258次発掘調査概要」(『向日市報告書』第31集 向日市教委・向日市七) 1991  
 39 「長岡京跡左京第273次発掘調査概要」(『向日市報告書』第33集 向日市教委・向日市七) 1992  
 40 「長岡京跡左京第106次発掘調査概要」(『向日市報告書』第17集 向日市教委) 1985  
 41 「左京第125次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報昭和60年度』) 1987  
 42 「左京第228次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報平成元年度』) 1991  
 43 「左京第235次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報平成元年度』) 1991  
 44 「長岡京跡左京第216次調査・長岡京工区」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 京都府七) 1990  
 45 「右京第344次調査概報」(『長岡京市埋文センター年報平成元年度』) 1991  
 46 「左京第210次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報昭和63年度』) 1990  
 47 「右京第339次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報平成元年度』) 1991  
 48 「長岡京跡左京第251次調査」(長岡京連絡協議会資料No.90-06) 1990  
 49 「長岡京跡左京第90次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教委) 1982

※文献24・37・48の座標値は、長宗繁一「長岡京条坊制についての私案」(長岡京連絡協議会資料 1991.2.27)による。

※文献21・34・47の座標値は、山中 章氏作成の条坊データ一覧表による。

正 誤 表

『京都府埋蔵文化財情報』第48号 18頁 付表1 左上

誤

正

No.	坊路名	検出側溝	
3	東四坊坊間小路	東	SD17412
		西	SD17413
4	東四坊坊間西小路	東	SD059B15
		西	SD059C01
5	東三坊大路 83.4尺	東	SD09927
		西	SD09936
6	東三坊坊間東小路	東	SD26708
		西	SD26707

→

No.	坊路名	検出側溝	
3	東四坊坊間小路 31.6尺	東	SD17412
		西	SD17411
4	東四坊坊間西小路 30.4尺	東	SD059B15
		西	SD059C01
5	東三坊大路 83.4尺	東	SD09927
		西	SD09936
6	東三坊坊間東小路 32.1尺	東	SD26708
		西	SD26707



平成5年度発掘調査略報

1. 薬師7号墳

所在地 熊野郡久美浜町字女布  
 調査期間 平成5年5月11日～6月4日  
 調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の女布団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて行ったものである。調査地は、久美浜町を北流する佐濃谷川流域右岸の低丘陵上にある。円墳8基で構成する薬師古墳群のうち、一部が団地造成にかかることから、昨年度より発掘調査を行ってきた。

調査概要 昨年の調査で主体部の一部を確認しており、今回は全容を把握するための全面調査である。その結果、古墳は、径約10mを測る円墳で、墳頂部から東西方向の主体部1基を確認した。主体部の東端部が根によって攪乱を受けており、全長は不明であるが、確認長約2.4m・幅約80cm・深さ約45cmを測る木棺直葬であった。主軸方向は、N-85°-Wで、床面の傾斜から西側に頭部があったものと思われる。遺物は、墳丘斜面や主体部内から須恵器片が少量出土した。これらの遺物は、6世紀中頃と考えられる。この付近は、中世に火葬骨埋納による墓地をつくるための造成が行われており、今回調査を行った7号墳の墳丘一部と東隣りの8号墳全部を削平していることが、現地形と断ち割り断面により明

らかとなった。8号墳は、径10mを測る円墳で、おそらく木棺直葬であったと思われる。時期については、古墳の規模や中世に整地した土からのわずかな遺物の出土から、7号墳とほぼ同じ時期と考える。

まとめ 今回は、古墳1基の発掘調査と全壊の古墳1基の確認調査となった。その成果は、この地域での6世紀中頃の古墳としての一資料となり、この付近の集落遺跡である女布、女布北遺跡に当時の住居跡の存在を示唆すると考える。(岡崎研一)



調査地位置図(1/50,000)

## 2. 神宮谷4号墳

所在地 綾部市別所町神宮谷  
 調査期間 平成5年4月19日～5月21日  
 調査面積 約100m<sup>2</sup>

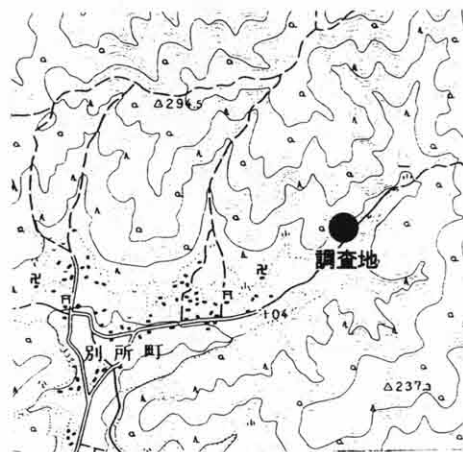
はじめに この調査は、京都縦貫自動車道の建設に先立ち、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。調査地は、由良川の支流である犀川の最上流域に位置し、神宮谷3号墳の南約50mの丘陵腹部に立地する。前年度の試掘調査の結果、横穴式石室墳と確認されたので、本調査を実施した。

**調査概要** 神宮谷4号墳は、後世の削平により主体部の基底部分しか残存せず、墳丘の規模・形態は不明である。石室の平面形は、袖石の抜き取り痕跡と思われる土坑一対がみられることから、両袖式になるものと推定される。石材は、堆積岩を用い、大きいもので一辺60～70cmの長方形のもので、主体部の北半部しか残存していない。石室の規模は、玄室長3.1m・玄室幅1.7mを測り、羨道長は削平のため不明であるが、羨道幅は約1.2m前後と考えられる。玄室床面上から石室の主軸と平行に並ぶ棺台に用いられたと思われる石列が検出され、少なくとも二つの木棺が安置されたものと考えられる。

出土遺物は、玄室床面から須恵器(杯身・杯蓋・高杯・提瓶・甗)・土師器(碗・壺)・鉄鏃・刀子・玉類(水晶製切子玉・碧玉製管玉・土製勾玉・土製丸玉・土製小玉など)・耳環等が出土している。このうち、土製丸玉・土製小玉は奥壁付近から300点以上、集中して出土した。

まとめ 出土遺物や石室の形態からみて、この古墳の築造年代は、6世紀後半に求めることができる。平成4年度に発掘調査を実施した神宮谷3号墳とともに、この地域における後期古墳の数少ない調査例として、貴重な資料を得たといえよう。

(尾崎昌之)



調査地位置図(1/50,000)

### 3. 若林遺跡

所在地 宇治市伊勢田町若林33  
 調査期間 平成5年5月6日～6月29日  
 調査面積 約400m<sup>2</sup>

はじめに 若林遺跡は旧巨椋池の南側にあたり、西に木津川を望む宇治丘陵の西北端部に位置し、標高は18～28mである。若林遺跡は、平成2年度に宇治市教育委員会により第1次調査が行われ、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の土壇墓、古墳等が検出されている。今回の発掘調査は、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査地は、平成4年度にまず宇治市教育委員会により約150m<sup>2</sup>の試掘調査が行われ、若干の遺物と竪穴状遺構・溝・土坑等の土色変化を確認した。以上の結果を受け、今回の第2次調査は宇治市教育委員会の調査区を拡張する形で調査区を設定した。

検出した遺構には掘立柱建物跡1棟、竪穴式住居跡2棟、多数の溝・土坑・ピット等がある。掘立柱建物跡は、2間×3間の南北を主軸とする。柱掘形は径50～60cmを測り、形状は楕円形及び隅丸方形を呈する。柱間距離は、2.3～2.5mの間に収まる。柱掘形は、1棟の竪穴式住居跡を切り込む。竪穴式住居跡は、2棟とも一辺しか検出していない。方形プランをもち、深さ10cm前後を測るものと隅丸方形プランで深さ30～40cmを測るものがある。また、後者の住居跡の埋土中からは奈良時代前半の土器が、掘立柱建物跡付近の包含層中

からは円面硯の破片が出土した。

まとめ 今回の調査区では、奈良時代を中心とする集落と、中世・近世に利用された溝を検出した。また出土遺物にはスクレイパーや円面硯等がある。これにより、若林遺跡は少なくとも弥生時代中期～中世・近世に至る複合集落遺跡であることが判明した。

さらに奈良時代を前後して竪穴式住居から掘立柱建物へと移り変わることを確認した。 (岸岡貴英)



調査地位置図(1/25,000)

## 4. 燈籠寺遺跡

所在地 相楽郡木津町大字木津小字内田山  
 調査期間 平成5年4月9日～5月28日  
 調査面積 約400m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、京都府立木津高等学校の体育館・体育振興施設の新築工事に先立ち、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。燈籠寺遺跡は、山城盆地の南端で、奈良県境を限る平城山丘陵の縁辺部に形成された台地性丘陵上に位置する。現在、この大半が木津高校の敷地となり、1958年に校地の北端で遺物が発見されて以後、学校施設の増改築に伴って調査を実施しており、今回で7次を数えるに至った。その結果、これまでに弥生から奈良時代の遺構・遺物が顕著にみられる複合遺跡であることが判明しつつある。

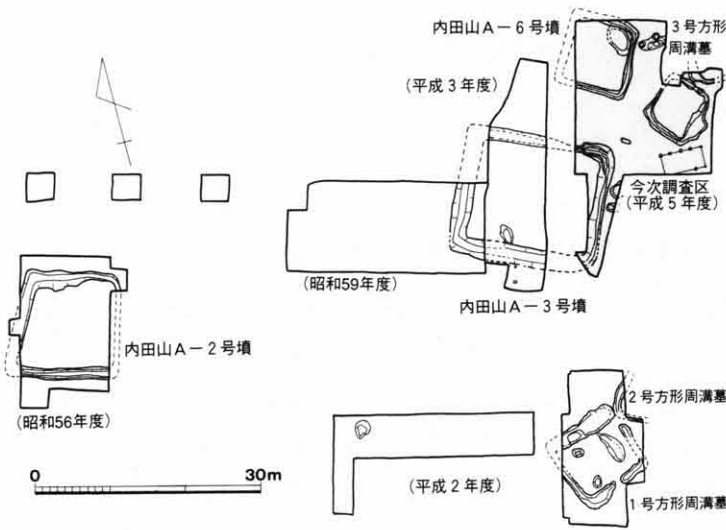
**調査概要** 今回の調査自体は、昨年度末から実施しており(6-2次)、調査対象地の東半部にあたる旧体育館跡地の大半が戦後の大規模な造成を受けて、大規模に改変されているといった成果をもとに、遺構面が残存する西側部(旧管理棟跡地)に調査区を設定した。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓1基、古墳時代中期の小方墳2基・埴輪棺1基をはじめ、不定形あるいはピット状土坑を複数検出した。

方形周溝墓は、一辺約7.0mを測り、主軸はN-45°-Wを示す。周溝は途切れずに四周をめぐるが、幅と深さは一定せず、南東辺中央と北東辺に溝中埋葬が想定できる。周溝内出土遺物(土器・石器剥片)から弥生中期前半(畿内第二様式併行期)に造営されたものである。方台部の埋葬施設は後述する古墳と同様削平を受けて残っていない。

小方墳のうち南側の1基は、過去の調査で確認した内田山A-3号墳の東辺部分にあたり、その規模を確定できた(東西17.5m・南北15.0m)。主軸はN-7°-Eで、同時期の他の古墳と同じ方位を示す。構造や出土遺物の内容(埴輪類と奈良期の土器類)は既掘部分と変わらないが、周溝北辺



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遺構配置図

が狭小になる事実が新たに判明した。

北側で新たに確認した小方墳(内田山A-6号墳と命名)は、東辺周溝の軸線を南6mにあるA-3号墳の東辺周溝の軸線と一致させている。西辺が調査区外にはずれるが、墳丘は南北で9.0m前後を測る。周溝の横断

面形は「U」字形を示し、内部から家形埴輪を含む埴輪類が出土した。A-3号墳とほぼ同時期で、5世紀前半代に築造されたものである。

上記3墳墓に挟まれる位置で検出された埴輪棺は、棺の主軸を古墳のそれと揃えている。棺本体はA-3号墳出土埴輪と同じ特徴をもつ普通円筒埴輪を転用して、複棺形態として用いている。墓壙長軸が1.4mを測り、成人埋葬には耐えない規模である。

調査区内に広く分布するピット状土坑のうち、南東隅で検出されたものが建物として復原できた。4間×1間の東西棟の側柱建物跡で、桁行1.4m・梁間2.8mの柱間寸法を測る。掘形が円形に近い平面形を呈し、内部から弥生土器片が複数出土したこと、さらに先の建物形式(梁間を1間とすること)から、弥生期の高床構造(倉)の建物の可能性がある。

まとめ 今回の調査で検出された遺構のうち、墳墓遺構については、周辺域ですでに調査例があり、それらも含めて概観すると、各墳墓間にある一定の築造企画の存在を読み取ることができる。特に、小方墳は、西側に位置するA-2号墳も含め、主軸方位を揃え計画的に配されているようすがうかがえる。この点で方形周溝墓がこれら小方墳と主軸を違えて営まれていることは、これと区別する意味で興味深い。一方、埴輪棺は当遺跡内では初めての検出になるが、この地域にあっては、埴輪を備える同形態の古墳の周囲で埴輪棺が普遍的に検出されており、今後の広範な調査によってはさらに増加するものと思われる。弥生中期の遺構については、南隣りの調査区(平成2年度)も合わせ、墓域と居住域が重複するかたちで検出された。今回の調査でも、周溝墓と掘立柱建物跡の先後関係は明確にできなかったが、比較的短期間のうちにその変遷をみたものと思われる。(伊賀高弘)

## 資料紹介

## 聚楽第跡出土の軒平瓦

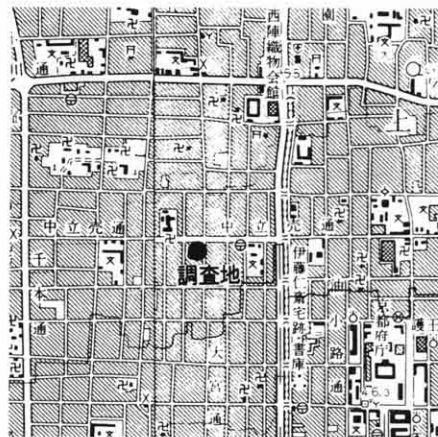
森島康雄

ここで紹介する資料は京都市上京区大宮通中立売下ル和水町の京都西陣公共職業安定所の庁舎改築工事に先立つ発掘調査によって、聚楽第の東堀から出土したものである。この堀は幅30m以上と推定され、現地表からの深さ8.4mを測る巨大なものである。瓦は堀を西側(本丸側)から人為的に埋めた土から出土した。したがって、聚楽第本丸内部の建物に使用され、文禄4(1595)年の聚楽第破却に際して廃棄されたことが確実な資料である。











堀からは多量の瓦が出土したが、軒丸瓦は同範の判定が極めて困難で型式分類はほとんど不可能である。一方、軒平瓦は型式分類が比較的行いやすく、他の城郭などから出土する資料との類似性を指摘することも可能である。<sup>(注1)</sup>安土桃山時代の瓦を研究しようという機運が高まりを見せている現在、聚楽第跡出土の軒平瓦の型式分類を行うことは、当該期の瓦の研究を進めるうえでも有用であると考えここに紹介することとした。

軒平瓦は瓦当文様の中心飾り及び脇飾りのほぼ全容が判明するものについてのみ、型式分類を行った。型式分類は第2～6図に示したが、同範瓦のあるものについては拓本を合成して、できるだけ文様構成をわかるようにしている。なお、41・42類には金箔の痕跡が見られないが、他はすべて金箔瓦である。

1～4類は先端の肥厚した五葉を中心飾りとし、三反転する唐草を脇飾りとするものである。1類は瓦当面上縁を面取りしない。ここに面取りを施さないのは1類と後述する39類のみである。1類は同範が3個体ある。5・6類は1～4類と同じく先端の肥厚した五葉を中心飾りとするものの、脇飾りの唐草が二反転になったものである。7類は扁平化した五葉に二反転する唐草が付くもので、小振りな瓦である。1～7類は上京周辺を中心








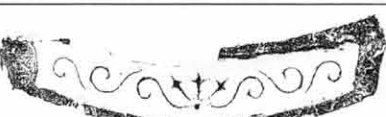




第1図 調査地位置図(1/25,000)

類別	拓 影	個体数
1		3
2		1
3		1
4		1
5		1
6		1
7		1
8		1
9		1
10		1

第2図 聚楽第跡出土軒平瓦分類図1(1/5)











に同じモチーフで範の異なるものが多数出土している。8類は五葉に萼が付いた中心飾りに三反転する唐草が付くもので、全体に端正な作りである。瓦当面の表面が欠損した部分にも金箔が貼られている。大津市坂本城<sup>(注2)</sup>・京都市押小路殿<sup>(注3)</sup>(二条殿)に類例がある。9類は珠文と五葉の中心飾りに三反転する唐草が付くものである。10類は三葉の中心飾りに三反転半の唐草が付く。11類は中心飾りが三葉で、脇飾りが三反転する唐草である。同範が3個体ある。大坂城に類例がある<sup>(注4)</sup>。12類は大きく開く三葉に三反転する唐草の脇飾りが付くものであるが、2反転目の唐草が長大化し、中心寄りの唐草は矮小化して中心飾りの上についている。同範が3個体ある。13類は中心飾りは三葉で、二反転半の脇飾りが付く。同じモチーフは滋賀県安土町安土城などにあるが同範ではなく、調整も安土城出土瓦に比べると極めて雑である。14類は大きく開く三葉を中心飾りとし、二反転する唐草の脇飾りを持つもので、武生市小丸城出土

瓦に似ているが、同範ではないようである。<sup>(注6)</sup>15・16類は剣菱状の三葉を中心飾りとし、三反転する唐草の脇飾りを持つ。16類は同範が6個体あり大和郡山市郡山城に類例がある。<sup>(注7)</sup>17～20類は三葉を中心飾りとし、三反転する唐草の脇飾りを持つ。17類と18類は唐草の反転する方向が逆になっている。同範は17類が3個体、18類が4個体、19類が3個体ある。17類は大坂城に類例がある。<sup>(注8)</sup>21類は、中心飾りが三葉で、三反転する連続した唐草の脇飾りを持つものである。同範は2個体ある。大坂城に類例がある。<sup>(注9)</sup>22類は三葉に萼が付いた中心飾りに三反転する唐草の脇飾りを持つものである。同範は7個体あるが文様区の上縁にナデを施すものと施さないものがあり、調整に差異が見られる。京都市伏見城に類例がある。<sup>(注10)</sup>23類は、三葉の中心飾りと二反転半する唐草の脇飾りを持つ。同範は2個体ある。24～26類は肉厚の三葉を中心飾りとし、二反転する脇飾りを持つもので、唐草に少しずつ違いがある。24類の平瓦部凹面に

類別	拓影	個体数
11		3
12		3
13		1
14		2
15		1
16		6
17		3
18		4
19		3
20		1

第3図 聚楽第跡出土軒平瓦分類図2 (1/5)













類別	拓影	個体数
21		2
22		7
23		2
24		6
25		1
26		4
27		1
28		9
29		8
30		8



第4図 聚楽第跡出土軒平瓦分類図3 (1/5)

は瓦当面に垂直な方向の板目状圧痕が共通して見られる。同范は24類が6個体、26類が4個体ある。24~26類のモチーフは伏見城に多く見られる<sup>(注1)</sup>が、伏見城では唐草文が幅広く、頂部に平端面を持つものが多い。27類は肉厚で大きく外に開く三葉を中心飾りとし、一反転半の唐草を脇飾りとするものである。28類は五葉と萼の下に根のような短い文様が三本付いた中心飾りと二反転する唐草の脇飾りを持つものである。瓦当文様区の左上部に範傷のあるものもないものがある。同范は9個体ある。29類は28類に似たモチーフであるが、中心飾りの五葉が三葉になり、脇飾りが枝分かれする二反転の唐草になっている。同范は8個体ある。30・31類は三葉の中心飾りと一反転する唐草を持つものである。30類の文様が直線的であるのに対して、31類は中心飾り、脇飾りとも丸みを帯びている。同范は30類・31類ともに8個体ある。32類は桐の葉を中心飾りとし、一反転する唐草の脇飾りをもつ。同范は6個体ある。33類は草文を

中心飾りとし、脇飾りには非対称な唐草<sup>?</sup>を配する。全体に文様の彫りが浅いため、地の部分にまで金箔が付着している。同範は4個体ある。34類は蓼の付いた花文を中心飾りとし、二反転する唐草をもつ。35類は様式化した宝珠を中心飾りとし、四反転する唐草を脇飾りとするもので、同範は2個体ある。36類は中心飾りが宝珠と波文で、三反転する唐草の脇飾りを配する。同範は5個体ある。37・38類は宝珠を中心飾りとする。脇飾りには子葉と二反転する唐草文を配する。37類は同範が2個体あり、長岡京市勝龍寺城に同範例がある<sup>(註12)</sup>。39類は波状文を配するものである。同範とは断定できないが同文のものが他に1個体ある。図示した個体は須恵質の焼成で、一見して他の瓦と異質であることがわかる。大坂城に類例がある<sup>(註13)</sup>。40類としたものは、3反転する唐草に子葉を配したの脇飾りを持つもので、中心飾りは5葉かと思われる。1個体のみ出土している。焼成が甘いためか表面が著しく摩滅している。京都府大山崎

類別	拓影	個体数
31		8
32		6
33		4
34		1
35		2
36		5
37		2
38		1
39		2
40		1

第5図 聚楽第跡出土軒平瓦分類図4(1/5)

	拓 影	個 体 数
41		1
42		1

第6図 聚楽第跡出土軒平瓦分類図5 (1/5)

町の山崎城で同範例が採集されている。<sup>(注14)</sup>41類は三葉を中心飾りとし、五反転する唐草の脇飾りを持つものである。1個体のみで、掛瓦として作られている。42類はいわゆる滴水瓦である。桐の葉を中心飾りとし、脇飾りは一反転の唐草がレリーフ状に表現されている。

ここで型式分類を行った41の型式の40%以上にあたる18の型式の瓦が各1個体のみしか出土していないのに対して、同範瓦が6個体以上出土している16類・22類・24類・28~32類の8つの型式で、分類の対象となった全個体数の約半数を占めている(120個体中の58個体)ことに気が付く。各型式の瓦の出土数の差は、聚楽第で使用されていたときの様相をどのように反映しているのであろうか。形式的にも新しいと思われる一反転する唐草の脇飾りを持つ一群が共通して後者に含まれることは、これらが聚楽第築城に際して新たに作られたものであることを示すものであろう。一方、前者(個体数の少ない一群)の中には聚楽第以前の他の城郭で同範瓦が出土しているものがあり、そこから聚楽第に集められてきたものが含まれている可能性がある。この中に、瓦当面の欠損した部分にも金箔を施したものの(8類)や、表面が全面にわたって著しく摩滅しているにもかかわらず文様部分に金箔が残っているもの(40類)が存在することは、各地から集められた様々な文様を持つ瓦が、金箔を施すことによって聚楽第所用瓦として再生されたことを物語っているように思われる。分析の対象が堀に投棄された資料であるために個々の瓦がどの建物に使用されていたかはわからないが、新たに作られた瓦と寄せ集められた瓦では、使用される建物も異なっていたことが予想される。

今回は瓦当文様による型式の分類を主目的にしたために、各型式間の系譜関係に言及することはできなかったが、さらに類例調査を進めることによって当時の瓦工人集団の動きにまで迫ることも可能ではないかと思われる。ここで分類を行った資料は種類が豊富であるうえに使用年代が限定されるため、極めて重要な基準資料のひとつと言えるだろう。

(もりしま・やすお=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 類例の調査については岐阜市歴史博物館の土山公仁氏をはじめ多くの方にご教示を得た。ま

た、拓影がほぼ一致するものを類例とし、そのうち、遺物を実際に照合して判定したもののみを同範例とした。

- 注2 特別展図録『信長・秀吉の城と都市』 岐阜市歴史博物館 1991 p.54 38-7・8
- 注3 松井忠春他『平安京跡研究調査報告 第12輯 押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』  
(財)古代学協会 1984 p.37 第24図-5
- 注4 黒田慶一他『難波宮址の研究 第九』 (財)大阪市文化財協会 1992 図面123-3889
- 注5 土山公仁「信長系城郭における瓦の採用についての予察」『岐阜市歴史博物館紀要 第4号』  
岐阜市歴史博物館 1990 p.7 第4図-3 p.16 第8図-3
- 注6 久保智康「越前における近世瓦生産の開始について ~武生市小丸城跡出土瓦の検討~」  
『福井県立博物館紀要 第三号』 福井県立博物館 1989 p.60 図10
- 注7 『追手向櫓・多聞櫓発掘調査報告書』(大和郡山市文化財調査概要6) 大和郡山市教育委員会  
1987 p.7 図8-6
- 注8 吉識 環他『大坂城三の丸の調査Ⅱ 大手口における発掘調査報告書』 大手前女子大学史学  
研究所 1983 PL.16-39
- 注9 注4 文献 図面123-3883他
- 注10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 『平安京跡発掘資料選(二)』 1986 p.47-53
- 注11 村尾政人「伏見城跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』 京都府教育委員会  
1980 p.168 第51図-4  
鈴木重治他『伏見城豊後橋北詰の調査』 伏見城研究会 1975 p.14 第10図-1 他
- 注12 岩崎 誠他『勝龍寺城発掘調査報告』(長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第6集) (財)長岡京  
市埋蔵文化財センター 1991 p.83 第35図-88
- 注13 注4 文献 図面106-3625
- 注14 中井 均「山崎城跡の構造と歴史-特に天正期秀吉築城を中心に-」『長岡京』第30号 長岡  
京跡発掘調査研究所 1983 p.12 第8図-4

府内遺跡紹介

60. 平野山瓦窯跡

平野山瓦窯跡は、京都府八幡市平野山から大阪府枚方市にかけて分布する、主として瓦を焼成した窯跡群である。ここは、これまで数度の発掘調査が実施された結果、大阪府にあって飛鳥時代の著名な寺院である四天王寺の所用瓦を焼成した窯としてよく知られるようになってきている。

四天王寺は、『日本書紀』の推古元(593)年は歳条に「始造 四天王寺於難波荒陵」や、『荒陵寺御朱印縁起』に「以 丁未歳 始建 玉造岸上、改點 此地 鎮 祭青龍、癸丑歳壞移 荒陵東」とあるように、飛鳥時代の聖徳太子建立の七大寺院の一つとして伝承されてきており、寺院の中でもよく知られたところである。特に、七大寺院の中でも四天王寺は、聖徳太子が幼小の頃に物部氏との戦において、木に四天王の像を刻んで祈願したという伝承とともにあったことから、聖徳太子信仰の高まりによって、多くの人々の信仰の対象となり、研究もさまざまな方面から行われている。なかでも、四天王寺の創建については、これまで、多くの先学によって研究が積み重ねられてきている。それによれば、ほぼ次のように集約することができよう。

まず、四天王寺の草創についてであるが、先にあげた平安時代の古い縁起類(『荒陵寺御朱印縁起』など)には、聖徳太子の祈願の甲斐あって、物部氏が滅んだ後に「玉造の東岸の地」で造られ、後の推古元(593)年になって現在地である「荒陵東」の地へ移転した



遺跡所在地(1/50,000)

とする。しかし、この伝承をめぐっては、これまでに大きく二種類の解釈が行われている。①この伝承を史実として移転を認める説、②この伝承は『日本書紀』の崇峻2(590)年7月条に「平亂之後、於 攝津國、造 四天王寺、分 大連奴半與 宅、爲 大寺奴田庄」とあるのを整合的に解釈するために生み出された伝承で、本来、四天王寺は草創期から現在の位置にあったとする説、の二つである。ここでは、いずれが正しいか判断することは

できないが、少なくとも推古朝の初期には四天王寺の造営が現在地で始まっていたことだけは確認できよう。

むろん、寺院の建立がこの年のうちだけで完了したのではない。『日本書紀』大化4(648)年2月己未条に「阿倍大臣請 四衆於四天王寺、迎 佛像四軀、使 坐 于塔内、造 靈鷲山像、累 積鼓 爲之」とあり、どうもこの頃に塔が完成して、仏像が安置されたらしい。したがって、前後あわせると、約60年が経過しており、かなりの年数が経ったことになる。この間、一貫して工事が継続されていたかどうかは不明であるが、『大同縁起』には、天智朝(7世紀後半)になって四天王寺の金堂に弥勒菩薩像が安置されたことが見え、また『興福寺流記』には中臣鎌足が四天王像などを四天王寺に安置しようとしたことが見えている。このことからすれば、寺院としての造営はほぼ7世紀の中頃には終了していたらしく、以後、経済的な裏付けとして封戸の施入などが行われており、国家として重要視された寺院であることがわかる。

四天王寺の造営は、文献史料からすれば、以上のように理解されてきている。ただ、文献史料の少ない時代のことであり、また、聖徳太子信仰の進展で事実が誇張されて伝わった可能性も高く、なかなか史実が把握しにくいのも事実である。その後、四天王寺の再建のため文化庁の主導で1955年から1957年にかけて発掘調査が実施された結果、建立についてはおおむね次のような事実が判明した。

①飛鳥時代に完成したのは、塔・金堂・中門・南大門で、回廊と講堂は計画は飛鳥時代になされていたが、完成は奈良時代前期にまで下ること、②瓦の編年から飛鳥時代の造営も7世紀初頭と前半に大きく分かれること、③この約100年かけて造営された伽藍も平安時代前期、とりわけ天徳4(960)年に火災を受け、平安時代中頃に再建されたこと、④江戸時代にも元和年間、文化年間というように、数回にわたって伽藍が再建されたが、明治以降になって、1934年の室戸台風による倒壊や1945年の戦災で焼失するに至った。なお、現在の伽藍は、1960年代になって再建されたものである。

以上の事実をふまえて平野山瓦窯の発掘調査成果を見ると、大阪府枚方市側で調査が行われた1979年の段階では、6基の瓦窯が確認されている。その後、京都府八幡市側で1985年・1992年に発掘調査が実施され、現在までに8基の瓦窯が確認されるに至った(附表)。窯は、いずれも登窯(管窯)で、窯の中の焼成部に階段のあるもの(有段式)とないもの(無段式)がある。

これらの調査の結果、この窯跡群の操業について3時期に大きく分かれることがわかってきた。第1期は、瓦・須恵器が生産された時期で、1・2・3・4・8号窯がこれにあたり、素弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、7世紀初頭頃になる。第2期は、5・

付表 平野山瓦窯跡規模一覧表

窯番号	形式	焼成部階段 (確認)	全長 (確認)	最大幅 (確認)	備考
1号窯	不詳	不詳	—	—	—
2号窯	地下式竈窯	無段式	2.2m	1.4m	須恵器専用窯か
3号窯	地下式竈窯	有段式(9段)	6.7m	2.4m	7回操業
4号窯	地下式竈窯	有段式(10段以上)	4.3m	2.1m	3回操業
5号窯	地下式竈窯	有段式			瓦片・鴟尾片出土
6号窯	地下式竈窯	有段式(6段前後)	2.8m	1.7m	4回操業
7号窯	地下式竈窯	有段式	5.2m	2.0m	数回操業
8号窯	地下式竈窯	有段式(5段以上)	3.3m	2.3m	3回以上操業、 瓦陶兼用窯か

6号窯の時期で、第1期よりも形式化した素弁蓮華文軒丸瓦が出土しているので、7世紀前半中頃くらいに比定されている。第3期は、7号窯の時期で、単弁蓮華文軒丸瓦とそれとセットになる重弧

文軒平瓦が出土しており、7世紀中葉頃と考えられている。

このように、この瓦窯跡で出土した四天王寺創建時の軒丸瓦は大きく三種類が出土している。この事実は、平野山瓦窯では、四天王寺の建立に当たって、かなりの長期間にわたって瓦を供給し続けていた。つまり、平野山瓦窯は、四天王寺を造営するにあたり、必要な瓦類を供給する窯としてはじめから造営されたことを示している。時期は、いずれも、7世紀のほぼ前半から半ばの内にあたり、先にあげた『日本書紀』の記事と基本的には時期が一致している。特に、大化4(648)年2月の阿倍大臣(右大臣の阿倍倉梯麻呂)が四天王寺に仏像を納めた時期と、瓦窯の第3期がほぼ一致する点が興味深い。あるいは、この頃に回廊以外の主要な伽藍の部分は完成して、寺院としてのすがたが整ったことを意味するものかもしれない。

このように、四天王寺という、わが国の仏教文化の最初期を飾る大寺院のための瓦窯が寺院から相当離れたところにある点が注目される。運搬には、もちろん淀川の水運を利用したことが推測されるが、それにしてもなぜこのような遠方に設けざるを得なかったのであろうか。飛鳥時代の寺院で瓦を遠方から運んだ例としては、飛鳥地方の豊浦寺があげられる。ここの瓦は、現在の宇治市隼上り窯跡から運ばれたもので、これも約90kmと相当な距離がある。

瀬川芳則氏は、四天王寺の瓦窯が楠葉から八幡にかけての地に設けられたことについて、この地が軍事的な拠点であったことを重視され、物部氏の滅亡後の政策と関係するのではないかと推定されている。おもしろい見方ではあるが、私は、このこと以外に、平野山瓦窯跡から法隆寺若草伽藍で用いられた瓦と同範瓦が出土していることに注目したい。法隆寺の若草伽藍は、聖徳太子の斑鳩宮に隣接して建立された寺院で、聖徳太子との関係が深いことはいうまでもない。その寺院に葺かれた瓦の範が四天王寺の造営に際して、平野山

瓦窯に運ばれて用いられたことは、聖徳太子が四天王寺の造営に何らかの形で関与していたことをうかがわせる。このことは、伝承とも合うところがあるので、政策的な見地からだけでなく、聖徳太子との関係で平野山の地が選定されていることも考慮する必要があるのではなかろうか。

以上のように、平野山瓦窯跡群については、まだ、不明な点が多いが、今後の調査・研究の進展によって位置づけが明らかになるとと思われる。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 藪田嘉一郎「荒陵という地名と四天王寺」『史迹と美術』349 1964.11  
藪田嘉一郎「荒陵という地名と四天王寺 補遺」『史迹と美術』351 1965.1  
『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告第六 文化財保護委員会 1967.3  
田中重久「聖徳太子建立七寺に関する新説」『聖徳太子研究』1971.11  
藪田嘉一郎「難波宮と四天王寺(上)」『史迹と美術』435 1973.6  
藪田嘉一郎「難波宮と四天王寺(中)」『史迹と美術』439 1973.11  
藪田嘉一郎「難波宮と四天王寺(下)」『史迹と美術』448 1974.10  
瀬川芳則「河内楠葉の飛鳥瓦窯群をもつ遺跡—大阪府枚方市楠葉東遺跡—」『日本歴史』388 1980.9  
瀬川芳則「四天王寺瓦窯跡と出土の須恵器」(『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズI 同志社大学考古学研究室) 1982.10  
『平野山瓦窯跡発掘調査概報』八幡市教育委員会 1985.3  
『楠葉平野山窯跡(第2次)発掘調査概報』八幡市教育委員会 1992.3



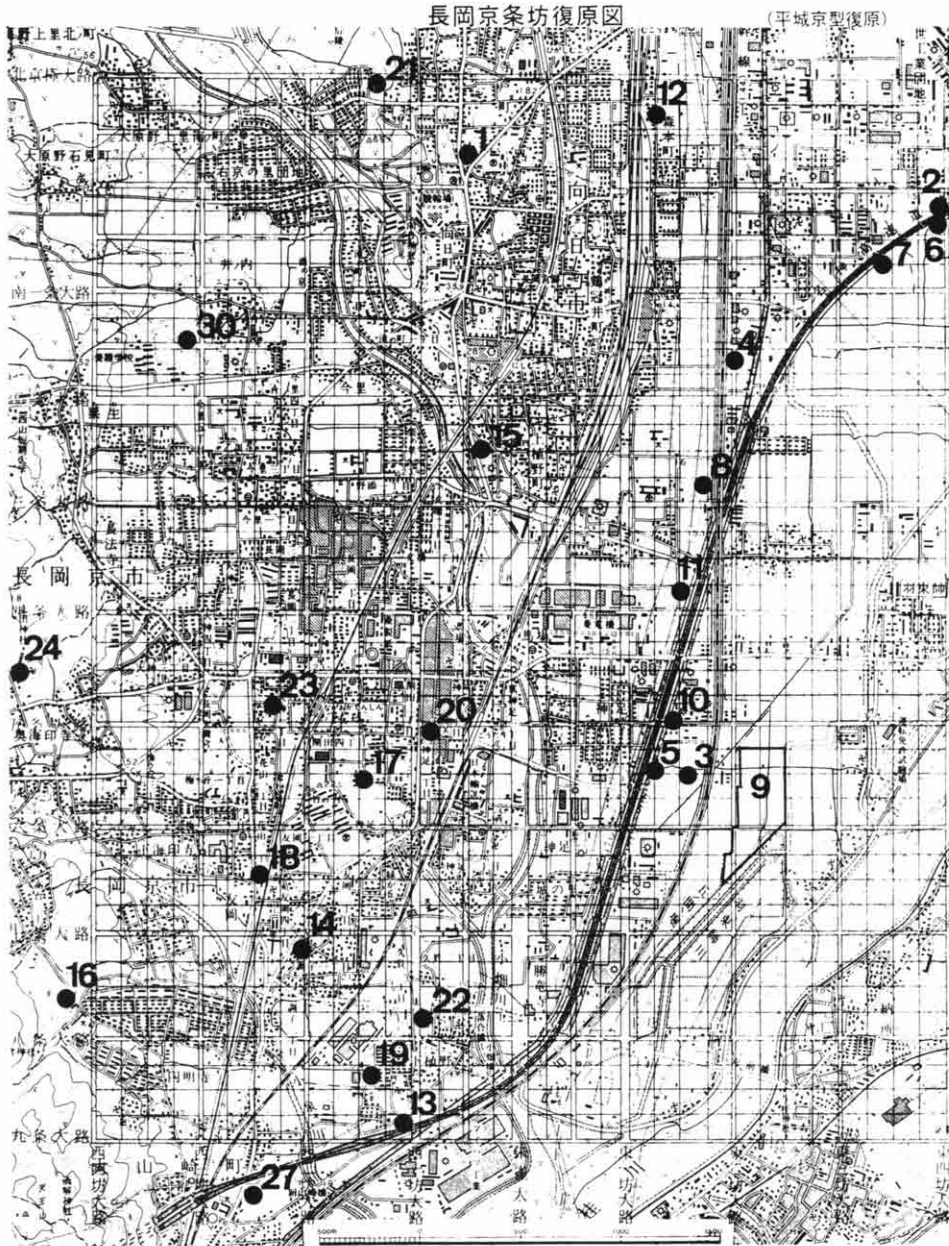
## 長岡京跡調査だより・46

平成5年5月26日・6月23日・7月28日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内1件、左京域11件、右京域11件、京外その他7件の計30件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1993年7月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内278次	7ANBMC	向日市寺戸町南垣内	(財)向日市埋文	4/1~7/15
2	左京286次	7ANWSA-2	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	4/7~
3	左京297次	7ANMJN-2	長岡京市神足拾貳11	(財)長岡京市埋文	2/17~5/20
4	左京301次	7ANESH-10	向日市鶏冠井町沢ノ東	(財)向日市埋文	4/2~7/31
5	左京302次	7ANMJN-3	長岡京市神足拾貳1	(財)長岡京市埋文	4/21~6/10
6	左京303次	7ANVKN	京都市南区久世東土川	(財)京都府埋文	6/22~
7	左京304次	7ANVNR	京都市南区久世東土川	(財)京都府埋文	5/7~
8	左京305次	7ANFST-4	向日市上植野町芝ヶ本	(財)向日市埋文	4/26~6/8
9	左京306次	7ANYOB-1	京都市伏見区淀橋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
10	左京307次	7ANMKK-3	長岡京市神足上八ノ坪	(財)長岡京市埋文	5/20~6/25
11	左京308次	7ANFHD-6	向日市上植野町菱田	(財)向日市埋文	6/2~8/31
12	左京309次	7ANDKD-4	向日市森本町上町田	(財)向日市埋文	6/15~7/15
13	右京428次	7ANTGT-5	大山崎町下植野五條本	(財)京都府埋文	4/8~
14	右京430次	7ANNKG-4	長岡京市友岡三丁目	(財)長岡京市埋文	4/26~6/5
15	右京431次	7ANFKK-2	向日市上植野町切ノ口	(財)向日市埋文	4/6~5/1
16	右京432次	7ANSTE-12	大山崎町円明寺鳥居前	大山崎町教委	4/9~6/8
17	右京433次	7ANKDD-2	長岡京市開田四丁目	(財)長岡京市埋文	5/6~5/21
18	右京434次	7ANNKC-3	長岡京市花山三丁目	(財)長岡京市埋文	6/1~7/20
19	右京435次	7ANTMK-4	大山崎町下植野宮脇	大山崎町教委	5/17~6/8
20	右京436次	7ANKSM-8	長岡京市開田二丁目	(財)長岡京市埋文	6/8~6/17
21	右京437次	7ANBNO-3	向日市寺戸町西野23	(財)向日市埋文	6/2~9/4
22	右京438次	7ANQMZ-2	長岡京市久具三丁目	(財)長岡京市埋文	6/17~7/29
23	右京439次	7ANKNZ-3	長岡京市天神一丁目	(財)長岡京市埋文	6/21~7/27
24	海印寺跡第2次調査		長岡京市奥海印寺	長岡京市教委	4/5~4/28
25	山崎国府跡第28次調査		大山崎町大山崎明島	大山崎町教委	4/8~5/14
26	山崎国府跡第29次調査		大山崎町大山崎西谷	大山崎町教委	4/21~6/30
27	第18次遺跡確認調査		大山崎町円明寺夏目	大山崎町教委	1/18~
28	第19次遺跡確認調査		大山崎町大山崎白味才	大山崎町教委	7/22~
29	南条古墳群-2		向日市物集女長野	(財)向日市埋文	7/21~8/7
30	井ノ内稲荷塚古墳		長岡京市井ノ内小西	大阪大学文学部	7/19~8/10



▽番号は一覧表・本文 ( ) 内と対応

調査地位置図

宮内第278次(1)

(財)向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙推定域の南辺部に位置し、奈良から平安時代の遺構を検出。奈良時代では、掘立柱建物跡2棟と溝跡、長岡京期では井戸跡がみられる。この他、縄文時代の石剣が出土した。

左京第301次(4)

(財)向日市埋蔵文化財センター

調査地は、新条坊呼称の左京二条二坊十四町、同三坊三町に相当する。条坊関連では、東二坊大路の東西溝と、それに伴う築地雨落ち溝、暗渠を検出した。大路の東西溝間の距離は、約24.54mを測る。出土遺物には、木簡・墨書土器・瓦等がある。

左京第302次(5)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

六条大路(新条坊呼称)の南北両側溝と東二坊坊間西小路の東側溝を確認。六条大路では、大路に伴う掘立柱堀跡2条と路面を斜めに横切る溝1条を検出した。出土遺物は、長岡京期の土器類のほか、墨書人面土器・製塩土器・瓦・陶硯・土馬・ミニチュア土器・木製品(横櫛、斎串、曲物底)・凝灰岩・神功開竇等がみられ、これ以外に弥生から古墳時代の遺物が出土した。なお、左京第297次調査(3)でも、六条大路の両側溝が確認されている。

(辻本和美)

長岡京連絡協議会では、現地調査の報告と合わせて、調査担当者がより長岡京への理解を深めるため資料報告を行っている。以下、昨年度の資料報告について発表者と題目を掲げておく。

年月	氏名	所属	題目
1992.4	戸原和人	京都府埋文	都城と官道 一長岡京と平安京の山陽道一
5	鍋田 勇	京都府埋文	長岡京条坊施工計画の再検討
6	中尾秀正	長岡京市	長岡京時代の交通路
7	林 亨	大山崎町	7世紀から11世紀における大山崎地域所在の諸施設の配置についての一考察
8	岩松 保	京都府埋文	乙訓郡内における地割りの変遷
9	中塚 良	向日市埋文	長岡京期前後の地形条件
10	山本輝雄	長岡京埋文	古代の喪葬儀礼について
11	秋山浩三	向日市埋文	京都府における土器製塩と製塩土器
12	岩崎 誠	長岡京埋文	長岡京期とその前後の土師器甕形土器
1993.1	石尾政信	京都府埋文	長岡京遷都前の乙訓地域、奈良時代(7世紀後半~8世紀)の遺構分布から
2	上村和直	京都市埋文	長岡京における人面土器祭祀
3	山中 章	向日市埋文	古代都城の「製塩」土器 其の一 長岡京期の「製塩」土器の様相

## センターの動向(5. 5～7)

1. できごと
5. 2 私市円山古墳公園竣工式(綾部市)  
出席(城戸局長、中谷次長、安藤課  
長、引原主任調査員、鍋田・石崎調  
査員)
- 6 若林遺跡(宇治市)発掘調査開始
- 11 左坂横穴群(大宮町)発掘調査開始  
薬師古墳(久美浜町)発掘調査開始
- 12 ジンド古墳(綾部市)発掘調査開始
- 14 神宮谷4号墳(綾部市)関係者説明  
会
- 18 いななきの岡南古墳・いななきの  
岡遺跡(加悦町)発掘調査開始
- 19～20 全国埋蔵文化財法人連絡協議  
会役員会(於：北九州市)出席(城戸  
局長、水谷係長、松尾主事)
- 20 内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開  
始
- 21 神宮谷4号墳発掘調査終了(4.19  
～)
- 26 燈籠寺遺跡(木津町)関係者説明会  
長岡京連絡協議会
- 27 左坂古墳群(大宮町)発掘調査開始
- 28 燈籠寺遺跡(木津高体育館跡)発掘  
調査終了(4.9～)
6. 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック会議(於：枚方市)出席(城  
戸局長、佐伯次長、安藤課長)  
薬師古墳発掘調査終了(5.11～)
- 8 桜遺跡(綾部市)発掘調査開始
- 10 燈籠寺遺跡(木津高食堂予定地)  
発掘調査開始
- 11 監事監査
- 14～15 全国埋蔵文化財法人連絡協議  
会総会(於：盛岡市)出席(城戸局  
長、佐伯次長、今村主事)
- 16 桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査開  
始
- 17 藤井 学理事、平安京跡(府警本  
部)現地視察  
平安京跡(府警本部)現地説明会
- 18 職員研修－ヨーロッパとアメリ  
カにおける遺跡の調査と保存－講  
師、都出比呂志理事
- 22 長岡京跡左京第304次(京都工区  
A-1地区・京都市)発掘調査開始
- 23 若林遺跡現地説明会  
長岡京連絡協議会
- 25 第37回役員会・理事会開催(於：  
京都ロイヤル・ホテル)福山敏男理  
事長、樋口隆康副理事長、城戸秀  
夫常務理事、中澤圭二、川上 貢、  
上田正昭、都出比呂志、藤田价浩、  
京極隆夫、堤 圭三郎の各理事、  
吉田三枝子、加藤裕之の各監事出  
席  
福山敏男理事長、米寿祝賀会(於  
：京都ロイヤル・ホテル)

- 全埋文コンピューター近畿ブロック地区委員会(於：大阪市)出席(土橋主任調査員)
- 燈籠寺遺跡(木津高食堂予定地)  
発掘調査終了(6.10～)
- 28 桑飼上遺跡発掘調査終了(6.16～)  
若林遺跡発掘調査終了(5.6～)  
長岡京跡左京第286次(京都工区B-1地区・京都市)発掘調査終了(4.7～)
- 29 平安京跡(府警本部)発掘調査終了(4.7～)
7. 1 長岡京跡右京第428次(下植野工区C-5a地区・大山崎町)発掘調査終了(4.7～)
7. 6 植物園北遺跡(京都市)発掘調査開始
- 7 北尻遺跡(精華町)発掘調査開始
- 8 堀坂神社古墳(久美浜町)発掘調査開始
- 9 山根古墳(舞鶴市)発掘調査開始  
桜遺跡関係者説明会
- 12 白米山北古墳(加悦町)発掘調査開始
- 15 今林古墳(八木町)関係者説明会  
桜遺跡発掘調査終了(6.8～)
- 19 都出比呂志理事、梅谷瓦窯跡(木津町)現地視察  
沢ノ谷遺跡(八木町)発掘調査開始  
荒坂横穴(田辺町)発掘調査開始
- 19～30 国際協力事業団(JICA)研修生専門研修(対応：当センター国際交流協力会)
- 20 上野古墳群(丹後町)発掘調査開始
- 23 溝谷古墳群(弥栄町)現地説明会、発掘調査終了(4.16～)
- 26 長岡京跡左京第313次(京都工区C-1地区・京都市)発掘調査開始
- 28 長岡京連絡協議会
- 29 樋口隆康副理事長、梅谷瓦窯跡現地視察  
いななきの岡南古墳、いななきの岡遺跡現地説明会、発掘調査終了(5.18～)
- (安藤信策)

受贈図書一覧(5. 5. 1～7. 31)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第80集 滝里遺跡群 III 滝里32遺跡・滝里33遺跡、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第81集 恵庭市 ユカンボシE 5遺跡、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第82集 芽室町 北明1遺跡(2) 音更町 西昭和2遺跡 池田町 十日川5遺跡、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第83集 美沢川流域の遺跡群 XVI -新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書- 第1分冊、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第83集 美沢川流域の遺跡群 XVI -新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書- 第2分冊、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 函館市 中野A遺跡(II) 本文編 -函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書-、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 函館市中野A遺跡(II)写真図版編 -函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書-、調査年報5 平成4年度

札幌市埋蔵文化財センター

札幌市文化財調査報告書XLII K435遺跡、札幌市文化財調査報告書XLIII N181遺跡、札幌市文化財調査報告書XLIV T151遺跡

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第179集 上鬼柳I遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第180集 兵庫館跡・梅ノ木台地II遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第181集 上反田遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第182集 法量野I遺跡・中屋敷遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第184集 泉屋遺跡発掘調査報告書 一閃遊水地事業関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第185集 仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書 国道46号稲荷前バイパス関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第190集 明通遺跡発掘調査報告書 国道281

- 号改良工事関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第191集 川井館跡発掘調査報告書 国道281号改良工事関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第193集 人当Ⅰ遺跡発掘調査報告書 北本内ダム建設工事関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第194集 上八木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書 新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第195集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成4年度)
- (財)いわき市教育文化事業団 いわき市教育文化事業団 年報3 平成3年度、いわき市教育文化事業団研究紀要 第4号、いわき市埋蔵文化財調査報告 第23冊 館崎横穴群、いわき市埋蔵文化財調査報告 第32冊 千代鶴横穴群
- (財)勝田市文化・スポーツ振興公社 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第8集 武田Ⅵ -1992年度武田遺跡群発掘調査の成果-
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第145集 今井白山遺跡、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第147集 下川田下原遺跡・下川田平井遺跡、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第147集 下川田下原遺跡・下川田平井遺跡(遺物観察表)、白井遺跡群 -中世編- 白井二位屋敷跡・白井南中道遺跡 一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集
- (財)長生郡市文化財センター 千葉県茂原市 桂遺跡群発掘報告書、千葉県長生郡長柄町 千代丸・力丸横穴墓群、千葉県長生郡長南町 小谷横穴墓、千葉県茂原市 新小轡遺跡、長生郡市文化財センター 年報No.6 -平成2年度-、(財)長生郡市文化財センター調査報告第15集 千葉県茂原市 国府関遺跡群
- (財)山武郡市文化財センター 財団法人山武郡市文化財センター 年報No.8、千葉県横芝町 木戸台大谷遺跡、千葉県成東町 比良台遺跡群、千葉県松尾町 大堤権現塚古墳 -確認調査報告書-
- 東京都立埋蔵文化財センター 多摩ニュータウンの遺跡と遺物
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 神奈川県の考古学の問題点とその展望 埋蔵文化財センター開所10周年記念
- (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 横浜市三殿台考古館館報 No.18 よこはまの遺跡-4-、神奈川県指定史跡 市ヶ尾横穴古墳群(B群)前庭部試掘調査報告
- (財)山梨文化財研究所 帝京大学山梨文化財研究所 研究報告第4集、第4回「考古学と中世史研究」シンポジウム「中世資料論の現在と課題」-中

	世考古学及び隣接諸学から－ 資料集
(財)岐阜県文化財保護センター	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第5集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 追分遺跡・下開田村平遺跡、岐阜県文化財保護センター調査報告書 第6集 鶴尾山城跡・深戸遺跡、岐阜県文化財保護センター調査報告書 第7集 藤原遺跡、岐阜県文化財保護センター調査報告書 第8集 深沼遺跡、岐阜県文化財保護センター調査報告書 第9集 元三ヶ根古墳群・白土原9・10号古窯跡、岐阜県文化財保護センター調査報告書 第10集 中茂遺跡、国道41号線改良工事に伴う発掘調査報告書
磐田市埋蔵文化財センター	住吉遺跡発掘調査報告書、大宝院廃寺遺跡(第3・5・6次)観音山古墳(周掘)発掘調査報告書、平成4年度 遠江国分寺周辺・国府台遺跡発掘調査報告書、大道西I古墳群遺跡・道東遺跡－送電用鉄塔建替えにともなう発掘調査報告書－、見付端城遺跡発掘調査報告書
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第1集、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第4集 西窯A窯跡I
三重県埋蔵文化財センター	平成4年度 三重県埋蔵文化財センター年報4、一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報V、三重県埋蔵文化財調査報告99-3 城之越遺跡－三重県上野市比土－、三重県埋蔵文化財調査報告104 一般県道田丸停車場斎明線道路改良事業に伴う 波瀬B遺跡発掘調査報告、三重県埋蔵文化財調査報告107 一般地方道安乗港道路特殊改良事業に伴う西殿遺跡発掘調査報告、三重県埋蔵文化財調査報告109 多気遺跡群発掘調査報告－志郡美杉村上多気所在－、三重県埋蔵文化財調査報告110 波田須城跡発掘調査報告－熊野市波田須町－、一般国道42号松阪・多気バイパス 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ、三重県埋蔵文化財調査報告101-6 近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告－第6分冊－ 蚊山遺跡左郡地区
守山市立埋蔵文化財センター	守山市文化財報告書 第42冊 伊勢遺跡発掘調査報告書 塚之越遺跡発掘調査報告書、守山市文化財報告書 第44冊 平成3年度国庫補助対象遺跡一、守山市文化財報告書 第47冊 平成4年度国庫補助対象遺跡一、守山市文化財報告書 第48冊 伊勢遺跡第22次発掘調査報告書一
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第28回)資料
(財)大阪府埋蔵文化財協会	大阪府立弥生文化博物館 平成5年夏季企画展図録 須恵器の始



(財)八尾市文化財調査研究会	まりをさぐる -第8回泉州の遺跡-
高槻市立埋蔵文化財調査センター	(財)八尾市文化財調査研究会報告36 太子堂遺跡 <第1次調査・第2次調査報告書>、平成4年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告
奈良国立文化財研究所	高槻市文化財調査報告書 第17冊 新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書、高槻市文化財調査報告書 第16冊 塚穴古墳群、高槻市文化財調査概要 XⅧ 嶋上遺跡群17、高槻市文化財調査概要 XⅨ 古曾部遺跡発掘調査概要、高槻市文化財年報 平成2年度
奈良市埋蔵文化財調査センター	平城宮発掘調査報告 XⅣ 奈良国立文化財研究所創立40周年記念学報 第51冊、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(10)、平城宮発掘調査出土木簡概報(26)、平城宮発掘調査出土木簡概報(27) 一長屋王家木簡4一、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(11)、1992年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、奈良国立文化財研究所年報 1992、四十年の春秋 奈良国立文化財研究所40周年記念図録
(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度、奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1992、平城京東市跡推定地の調査 XⅠ 第13次発掘調査概報
鳥根県埋蔵文化財調査センター	一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ 鳥取県西伯郡淀江町 今津塚田遺跡 福岡遺跡6区、一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ 鳥取県西伯郡淀江町 井手勝遺跡 本文編、一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ 鳥取県西伯郡淀江町 井手勝遺跡 図版編、一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ 鳥取県東伯郡羽合町 南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24~28号墳、一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅳ 鳥取県東伯郡泊村 園西川遺跡・園7号墳・原第2遺跡
	鳥根県教育庁文化課 埋蔵文化財調査センター年報 Ⅰ 平成4年度、遺跡が語る古代の歴史 一一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報一、国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 Ⅳ 一八色谷古墳群一、志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 Ⅰ 板屋Ⅱ遺跡、一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅳ (越峠遺跡・宮内遺跡)、一般国道9号松江道路建設予定地

	内 埋蔵文化財発掘調査報告書X I (オノ峠遺跡)、古曾志遺跡群発掘調査報告書 一朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査一、石台遺跡Ⅱ 一発掘調査報告一
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財報告 23、塚の平古墳群 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査、赤浜散布地ほか 県営土地改良総合整備事業に伴う確認調査、山陽自動車道建設に伴う発掘調査5 (本文)、山陽自動車道建設に伴う発掘調査5 (表・図版)、山陽自動車道建設に伴う発掘調査6 (本文)、山陽自動車道建設に伴う発掘調査6 (写真・図版)、山陽自動車道建設に伴う発掘調査7、百間川沢田遺跡3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅷ(本文)、百間川沢田遺跡3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅷ(表・図版)
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡発掘調査報告 I 一北部地域北半部の調査一
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第1集 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成4年度、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要I、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成4年度、県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 尾崎西遺跡 平成4年度、中小河川大東川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 川津一ノ又遺跡 平成4年度
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書33 影浦谷古墳、松山市文化財調査報告書 第35集 古照古墳 一第6次調査一
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第6集 岡豊城跡Ⅱ一第6次発掘調査報告書一、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第2集 県史跡 鹿持雅澄邸跡 県史跡鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、大谷古墳 一県立野市総合公園建設に伴う一発掘調査報告書、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集 ひびのきサウジ遺跡Ⅱ 土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集 十万遺跡Ⅱ 高知県経済連LPガス容器検査所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第5集 チシ古城跡 高知西南地区大規模農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、高知県埋蔵文化財センター年報1 1991年度、

	高知県埋蔵文化財調査報告書 第36集 平成2・3年度 高知県遺跡詳細分布調査概報-土佐・吾川ブロッカー、大方町埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 竹シマツ遺跡・宮崎遺跡、土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第12集 土佐山田北部遺跡群 -山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵試掘調査報告書-、高知県埋蔵文化財調査報告書 第35集 高知県遺跡地図 -土佐・吾川ブロッカー
仙台市教育委員会	下ノ内浦遺跡 -みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書-、北前遺跡 -第3次発掘調査報告書-〈太白区消防署建設関連〉、燕沢遺跡 第4・5・6次発掘調査報告書、沼遺跡 -仙台市上谷刈土地地区画整理事業関係調査報告書-、大連寺窯跡 -第2・3次発掘調査報告書-、郡山遺跡XⅢ -平成4年度発掘調査概報-、仙台平野の遺跡群XⅡ 平成4年度発掘調査報告書 山田条里遺構発掘調査報告書、洞雲寺遺跡
いわき市教育委員会	根岸遺跡 -平成4年度範囲確認発掘調査概報-
足利市教育委員会	足利市埋蔵文化財調査報告 第25集 平成3年度埋蔵文化財発掘調査年報
群馬町教育委員会	国分境Ⅲ遺跡 毎日新聞北関東コア建設に係わる埋蔵文化財発掘調査、町内遺跡Ⅰ
鳩山町教育委員会	鳩山窯跡群発掘調査報告書 第2冊 -窯跡編(2)-、鳩山窯跡群発掘調査報告書 第3冊 -工人集落編(1)-、鳩山窯跡群発掘調査報告書 第4冊<増刷> -工人集落編(2)-
千葉市教育委員会	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 -平成4年度-
袖ヶ浦市教育委員会	平成4年度 袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 水神下遺跡
大栄町教育委員会	大慈恩寺遺跡
小平市教育委員会事務局	小平市埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集 平成4年度 市内遺跡発掘調査報告書
神奈川県教育庁	天然記念物総合診断(第3報)
小田原市教育委員会	小田原市文化財調査報告書 第40集 小田原城三の丸 箱根口門跡、小田原市文化財調査報告書 第42集 小田原城下 欄干橋町遺跡、小田原市文化財調査報告書 第43集 小田原城三の丸 大久保雅楽介邸跡Ⅱ地点
鎌倉市教育委員会	鎌倉市二階堂史跡永福寺跡 国指定遺跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書 -平成4年度-、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度 発掘調査報告(第1分冊)、鎌

海老名市教育委員会	倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度 発掘調査報告(第2分冊)、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度 発掘調査報告(第3分冊) 大谷向原遺跡(遺物編) 東名自動車道海老名SA改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、大谷向原遺跡(遺構編) 東名自動車道海老名SA改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、神奈川県海老名市 大谷真鯨遺跡
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書 第7輯 天神遺跡
明野村教育委員会	明野村文化財調査報告7 屋敷添
岡谷市教育委員会	榎垣外・海戸遺跡・地獄沢 発掘調査報告(概報)
竹田市教育委員会	史跡岡城跡 平成4年度 史跡岡城跡保存修理事業報告書、竹田地区南部遺跡群Ⅳ 平成4年度 竹田地区遺跡発掘調査報告書
氷見市教育委員会	氷見市埋蔵文化財調査報告書 第14冊 氷見市遺跡地図 [第2版]、氷見市埋蔵文化財調査報告書 第15冊 氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅱ -阿尾島尾A遺跡概報-
魚津市教育委員会	新川地方の縄文時代 -翡翠(ヒスイ)と石斧(いしおの)づくりの村々-
美濃市教育委員会	椋ノ木遺跡発掘調査報告書、椋ノ木遺跡発掘調査報告書Ⅱ、美濃市文化財調査報告 第4号 上巾上遺跡発掘調査報告書、美濃市文化財調査報告 第5号 上巾上Ⅱ遺跡、美濃市文化財調査報告 第6号 美濃市西南部古窯址群
湖西市教育委員会	湖西市文化財調査報告 第29集 湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書、湖西市文化財調査報告 第30集 大知波峠廃寺跡Ⅲ、湖西市文化財調査報告 第31集 大知波峠廃寺跡Ⅳ
名古屋市教育委員会	名古屋市文化財調査報告書24 埋蔵文化財発掘調査報告書
常滑市教育委員会	常滑市文化財調査報告書 第21集 亀塚池古窯址群発掘調査報告書、常滑市文化財調査報告書 第22集 四池・松潤古窯址群発掘調査報告書
吉良町教育委員会	善光寺沢遺跡 -発掘調査の概要-
鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市埋蔵文化財調査報告11 南谷遺跡 -中部電力株式会社鉄塔建設事業に伴う発掘調査-、伊勢国分寺跡(5次)・長者屋敷遺跡(1次)発掘調査概要報告
滋賀県教育委員会	平成4年度 年報、紀要 第1号
八日市市教育委員会	雪野山古墳Ⅲ -第4次発掘調査概報-、雪野山古墳発掘調査概報、八日市市文化財調査報告(12) 川合寺遺跡発掘調査報告書
秦荘町教育委員会	金剛輪寺坊跡分布調査報告書Ⅰ(北谷、西谷、東谷)

五個荘町教育委員会	五個荘の文化財(Ⅶ) 一 小幡人形編一、五個荘文化財調査報告 25 滋賀県神埼郡・新堂遺跡
大阪市教育委員会	平成3年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
高石市教育委員会	大園遺跡 他の発掘調査概要
岸和田市教育委員会	平成4年度 発掘調査概要、岸和田市文化財調査概要報告1 久米田古墳群発掘調査概要Ⅰ 一 久米田公園(池尻地区)再整備 事業に伴う発掘調査一
河内長野市教育委員会	河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅷ、河内長野市埋蔵文化財調 査報告書Ⅸ
藤井寺市教育委員会	石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ 藤井寺市文化財報告 第9集
羽曳野市教育委員会	檜山地区試掘調査報告、古市遺跡群ⅩⅣ 羽曳野市埋蔵文化財 調査報告書29、河内古市古墳群 峯ヶ塚古墳概報
柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1992年度、柏原市文化財概報 1992-Ⅲ 本郷遺跡、柏原市遺跡群発掘調査概報 1992年度、柏 原市文化財概報 1992-V 大県南遺跡
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書8 狭山神社遺跡 試掘調査報告書2
神戸市教育委員会	昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報、平成元年度 神戸市埋蔵文 化財年報、平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報、押部遺跡 神戸 市西区押部谷町所在第2次発掘調査概報、本山遺跡 第12次調 査の概要、雲井遺跡 一第1次発掘調査報告書一、平成元・3年 度 遺跡現地説明会資料、地下に眠る神戸の歴史展Ⅸ 発掘調査 速報展
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第23集 平成4年度国庫補助事業 芦屋 市内遺跡発掘調査概要報告書、平成3年度 芦屋市立美術博物 館年報
豊岡市教育委員会	但馬豊岡城 一 豊岡城とその城下一
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財報告18 鴨谷遺跡 一 発掘調査報告書一、加西 市埋蔵文化財報告13 小谷遺跡(第4次)、加西市埋蔵文化財調 査報告19 三反田遺跡(第2次) 一 吉野農機具格納庫建築工事に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告一、加西市埋蔵文化財報告19 土 井ノ内遺跡 一 発掘調査報告書一
岡山市教育委員会	小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告、岡山市指定重要文化財 安 住院本堂保存修理報告書
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財調査年報2、総社市埋蔵文化財発掘調査報告 10 折敷山遺跡・雲上山11号墳、総社市埋蔵文化財発掘調査報告 11 藤原北古墳群、総社市埋蔵文化財発掘調査報告12 牛飼山古

広島県教育委員会  
府中市教育委員会

大野町教育委員会  
下関市教育委員会  
豊北町教育委員会  
高松市教育委員会

福岡市教育委員会

墳群、総社市埋蔵文化財発掘調査報告13 すりばち池古墳群  
広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第1集  
備後国府跡 - 推定地にかかる1990年度調査 -、備後国府跡  
- 推定地にかかる1991年度調査概報 -  
広島県佐伯郡大野町 西国街道向原石畳発掘調査報告書  
足河内遺跡・炭釜遺跡  
土井ヶ浜南遺跡Ⅱ 松成遺跡  
弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報Ⅳ、高松市内  
埋蔵文化財試掘調査概報(平成3年度・4年度)、一般国道11号  
高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 さこ・  
長池遺跡、一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告 第1冊 さこ・長池遺跡(付図)  
博多32 - 博多遺跡群第68次発掘調査報告 - 福岡市埋蔵文化財  
調査報告書 第287集、香椎A 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第  
317集、名島城跡Ⅰ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第318集、吉  
塚本町遺跡 - 吉塚本町遺跡 第1次調査報告書 - 福岡市埋蔵  
文化財調査報告書 第319集、吉塚本町遺跡2次調査 福岡市埋  
蔵文化財調査報告書 第320集、立花寺2 - 第2次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第321集、雀居遺跡1 福岡市埋  
蔵文化財調査報告書 第322集、那珂7 福岡市埋蔵文化財調査  
報告書 第323集、那珂遺跡8 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第  
324集、比恵遺跡群(12) - 比恵遺跡群第37次・39次発掘調査報  
告書 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第325集、博多34 福岡市  
埋蔵文化財調査報告書 第326集、博多35 - 博多遺跡群第55次  
調査 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第327集、博多36 - 博多  
遺跡群第59次調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第328  
集、博多37 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第329集、博多38 -  
博多遺跡群第66次調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第  
330集、博多39 - 博多遺跡群第75次調査報告 - 福岡市埋蔵文  
化財調査報告書 第331集、博多40 - 博多遺跡群第76次調査の  
報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第332集、野多目拈渡遺  
跡4 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第333集、干隈遺跡 - 飯倉  
G遺跡1～3次調査 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第334集、  
タカバン塚古墳 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第335集、飯倉  
C遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第336集、原遺跡7 福  
岡市埋蔵文化財調査報告書 第337集、藤崎遺跡8 福岡市埋蔵

	文化財調査報告書 第338集、有田・小田部 第17集 -第160・169次調査- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第339集、有田・小田部 第18集 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第340集、熊本遺跡群Ⅰ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第341集、岩本遺跡 -岩本遺跡群第3次調査報告- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第342集、入部Ⅳ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第343集、脇山Ⅴ - 県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡6次調査報告- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第344集、羽根戸古墳群2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第345集、羽根戸古墳群(3) -B群4号墳調査報告書- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第346集、羽根戸古墳群4 -羽根戸古墳群B群5号墳の調査- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第347集、野方久保遺跡(Ⅱ) 第1次調査報告書 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第348集、拾六町平田遺跡 第2次調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第349集、青木遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第350集、相原古墳群2 -C群第1次・2次、E群第1次調査の報告- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第351集、国道202号墳今宿バイパス関係埋蔵文化財報告Ⅳ 飯氏遺跡群1 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第352集、山ノ鼻2号墳 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第353集、能古島 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第354集、鴻臚館跡Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第355集、福岡市埋蔵文化財年報Vol.6 -平成3(1991)年度-
直方市教育委員会	黍田遺跡 直方市文化財調査報告書 第14集、上頓野宮ノ前遺跡 直方市文化財調査報告書 第15集
八女市教育委員会	八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報2 八女市文化財調査報告書 第19集、赤氏遺跡 八女市文化財調査報告書 第20集、上柳遺跡 八女市文化財調査報告書 第21集、三河小学校庭遺跡 八女市文化財調査報告書 第22集、八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報3 八女市文化財調査報告書 第23集、釘崎古墳群 八女市文化財調査報告書 第24集、東館遺跡 八女市文化財調査報告書 第25集、熊野遺跡 八女市文化財調査報告書 第26集、室岡工業用地内遺跡Ⅰ 八女市文化財調査報告書 第27集、岡山公園古墳 八女市文化財調査報告書 第28集、八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報4 八女市文化財調査報告書 第29集
志免町教育委員会	松ノ尾古墳群 志免町文化財調査報告書 第4集、亀山古墳 志

水巻町教育委員会	免町文化財調査報告書 第5集 水巻町文化財調査報告書 第1集 苗代谷遺跡 福岡県遠賀郡水巻町所在遺跡の調査
津屋崎町教育委員会	津屋崎町文化財調査報告書 第8集 宮司大ヒタイ遺跡
大刀洗町教育委員会	本郷野開遺跡 大刀洗町文化財調査報告書 第4集、下高橋上野遺跡 大刀洗町文化財調査報告書 第5集
鎮西町教育委員会	鎮西町文化財報告書 第10集 沙子遺跡 一般県道波戸岬線建設に伴う調査、鎮西町文化財報告書 第11集 片桐且元陣跡 木村重隆陣跡 平成元年～3年度 町内遺跡詳細分布調査
三加和町教育委員会	三加和町文化財調査報告 第7集 田中城跡Ⅶ
大分市教育委員会	国指定史跡 古宮古墳 一史跡整備に伴う発掘調査概報一
宮崎市教育委員会	浄土江遺跡Ⅱ 宮崎市文化財調査報告書、史跡 蓮ヶ池横穴群 保存環境整備事業報告書
えびの市教育委員会	長江浦地区遺跡群 役所田・小路ノ下遺跡、原田・上江遺跡群 蔵元・法光寺・中満遺跡
高崎町教育委員会	高崎町文化財調査報告書 第4集 朴木遺跡
鹿児島市教育委員会	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(16) 清水城跡
加世田市教育委員会	加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 西荒田遺跡、加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 一寸原遺跡・千河原遺跡
岩手県立博物館	岩手県立博物館研究報告 第10号、鉄の歴史と文化 一開館10周年記念講演会講演録集一
大船渡市立博物館 (社)日本金属学会附属金属博物館	三陸の大漁カンバン 一犬漁祝いの意匠一 金属博物館紀要 第19号
秋田県立博物館	秋田県立博物館館報 平成4年度、秋田県立博物館研究報告 第18号
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 常設展示ガイド
土浦市立博物館	第13回企画展 開かれた古代への扉 一田村・沖宿遺跡群の調査一
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第47集、国立歴史民俗博物館研究報告 第48集、国立歴史民俗博物館研究報告 第49集、国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁 西日本編1、国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁 西日本編2、国立歴史民俗博物館博物館資料



市立市川考古博物館  
千葉県立中央博物館

大田区立郷土博物館

世田谷区立郷土資料館  
出光美術館  
富山市考古資料館  
松本市立博物館

石川県立歴史博物館  
岐阜県博物館  
沼津市歴史民俗資料館  
名古屋市見晴台考古資料館

名古屋市博物館  
半田市立博物館  
齋宮歴史博物館  
滋賀県立安土城考古博物館

料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁 西日本編3

市立市川考古博物館年報 平成3年度・第20号

千葉県立中央博物館研究報告 -人文科学- 第2巻第2号(通巻5号)、千葉県立中央博物館研究報告 -人文科学- 第3巻第1号(特別号、通巻第6号)

大田区立郷土博物館紀要 第3号 1992年度、ガイドブック セーラムの歴史、大田区 海苔物語、大田区 古墳ガイドブック -多摩川に流れる古代のロマン-

世田谷区史料叢書 第8巻

出光美術館館報 第81号、出光美術館館報 第82号

富山市考古資料館紀要 第11号、富山市考古資料館紀要 第12号  
松本市二反田・岡田町遺跡 -緊急発掘調査報告書-(本文編)、松本市二反田・岡田町遺跡 -緊急発掘調査報告書-(図版編)、松本市山影遺跡 -緊急発掘調査報告書-、埴原北・中山古屋敷・推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ・小丸山古墳 -緊急発掘調査報告書-、松本市針塚遺跡Ⅱ -緊急発掘調査報告書-、松本市大村 古屋敷遺跡・前田遺跡 -緊急発掘調査報告書-、松本市高綱中学校遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ -緊急発掘調査報告書-、弘法山古墳出土遺物の再整理 -新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理-、松本城三の丸跡 ~土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報~

羅漢 -仏法護持の聖者像-

岐阜県博物館報 第16号

沼津市博物館紀要17

NN288号窯・NN289号窯 発掘調査報告書、年報 9、見晴台遺跡 第29次発掘調査の記録、見晴台教室'92 -見晴台遺跡第31次発掘調査市民参加の記録-、堅三蔵通遺跡 -第12次調査の概要-、中区丸の内一丁目・二丁目 名古屋城本町御門跡 発掘調査概要報告書、名古屋市緑区大高町 菩薩遺跡 第3次発掘調査の概要、荒池北古窯(NNN335号窯)発掘調査概要報告書、中区正木一丁目 正木町遺跡第2次発掘調査概報

名古屋市博物館 研究紀要 第16巻

半田市立博物館 年報 平成4年度

企画展 王朝文化の美 平安京

春季特別展 湖と海の王 -古墳時代の近江と越前・若狭・丹後-、春季特別展 湖と海の王 -古墳時代の近江と越前・若狭・

	丹後一
彦根城博物館	彦根城博物館年報 平成元年度・2年度、彦根城博物館年報 平成3年度、彦根城博物館研究紀要 第4号
高島町歴史民俗資料館	高島町文化財資料集-15 鷗川ダキワ谷シン垣調査概要、高島町文化財資料集-16 大溝郭内遺跡調査概要
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No.32、大阪市立博物館研究紀要 第25冊
吹田市立博物館	平成4年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報
大東市立歴史民俗資料館	大東市埋蔵文化財調査報告 第9集 大東市埋蔵文化財発掘調査概報 1992年度
柏原市立歴史資料館	平成5年度企画展 よみがえる古代、東洋古陶磁と招来茶陶展 柏原市立高井田文化教室「柏陽庵」完成記念特別展、柏原市歴史資料館 館報4
兵庫県立歴史博物館	兵庫県立歴史博物館紀要 塵界 第6号
洲本市立淡路文化史料館	淡路文化史料館10年史
西脇市郷土資料館	播磨・水尾城跡の調査と研究
香芝市二上山博物館	第3回特別展 朱と黄金の世界・藤ノ木古墳
橿原市千塚資料館	かしはらの歴史をさぐる 平成4年度埋蔵文化財発掘調査速報展
鳥取県立博物館	鳥取県立博物館研究報告 第30号、郷土と博物館 第38巻第1号(通巻75号)、郷土と博物館 第38巻第2号(通巻76号)
広島県立歴史民俗資料館	年報 平成3(1991)年度、考古企画展 ひろしまの青銅器
山口県立山口博物館	山口県立山口博物館研究報告 第19号、館報16 平成4年度
佐賀県立博物館	弥生のロマン -倭人の原像を求めて-
佐賀県立九州陶磁文化館	肥前地区古窯跡調査報告書 第10集 鹿島市浜町皿山窯跡、九州陶磁文化館年報 平成3年度 No.11
宮崎県総合博物館	宮崎の遺跡 1982-1991
ミュージアム知覧	南別府城跡 -城山遺跡-
茨城大学人文学部	博古研究 第5号
千葉大学文学部考古学研究室	大寺山洞穴測量調査概報
早稲田大学考古学会	古代 第95号
東京大学文学部考古学研究室	東京大学文学部 考古学研究室研究紀要 第11号
慶應義塾総合企画室	湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論
國學院大學考古學資料館	國學院大學 考古学資料館紀要 第9輯
國學院大學文学部考古学研究室	國學院大學文学部考古学研究室実習報告 第22集 物見処遺跡 1992、國學院大學文学部考古学研究室実習報告 第23集 柳又遺

- 東洋大学文学部史学科研究室 東洋大学文学部紀要 第46集 史学科篇 第18号、白山史学 第29号
- 国士館大学文学部考古学研究室 考古学研究室報告 乙種第8冊 「栃木県真岡市・荘厳寺石造重層塔実測調査」、考古学研究室報告 乙種第9冊 栃木県南河内町 下野薬師寺跡 - 史跡整備に伴う発掘調査 -
- 金沢大学文学部考古学研究室 金沢大学考古学紀要 第20号
- 愛知大学文学部史学科 愛知史学 - 日本史・東洋史・地理学 - 創刊号
- 名古屋大学文学部考古学研究室 名古屋大学文学部 研究論集116 史学39、考古資料ソフテックス写真集 第8集
- 大阪大学文学部 雪野山古墳Ⅲ - 第4次発掘調査概報 -
- 近畿大学文化会考古学研究会 七古歩 1992 16号
- 大手前女子大学史学研究所 兵庫津・兵庫津遺跡発掘調査概報、郡家遺跡 神戸市東灘区所在・御影中町地区第4次調査、J R伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書 有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ 第1分冊、J R伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書 有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ 第2分冊
- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊 鹿田遺跡3
- 広島大学文学部考古学研究室 中国地方製鉄遺跡の研究
- 愛媛大学法文学部考古学研究室 江口貝塚Ⅰ - 縄文前中期編一、江口貝塚 第2次・第3次発掘調査資料 1990~1991、妙見山古墳発掘調査概報Ⅱ・埋葬施設編
- 九州大学文学部九州文化史研究施設 九州文化史研究所紀要 第38号(比較考古学部門関係抜刷集)
- 熊本大学文学部考古学研究室 宇宿小学校遺跡
- 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅷ 平成4年度
- 多賀城市文化センター 多賀城市文化財調査報告書 第33集 年報6、多賀城市文化財調査報告書 第34集 山王遺跡ほか - 発掘調査報告書 -
- 大宮市遺跡調査会 中川貝塚、C-23号遺跡 A-214号遺跡、大和田高明遺跡、指扇下戸遺跡、深作稻荷台遺跡 東北原遺跡 - 第9次調査 -、氷川神社東遺跡 氷川神社遺跡 B-17号遺跡、大むかしのくらし - 掘りおこされた大宮の昔 -
- 山武考古学研究所 山武考古学研究所年報 No. 10
- 東邦考古学研究会 東邦大学付属東邦高等学校東邦考古学研究会会誌 東邦考古 第17号

- |                            |  |
|----------------------------|--|
| (株)名著出版                    | 歴史手帖 第21巻5号～8号   |
| (財)角川文化振興財団                | 新版「古代の日本」第1巻 古代史総論   |
| 学術文献刊行会                    | 日本史学文献目録 古代・中世 1991(平成3)年版   |
| 新宿区内藤町遺跡調査会                | 新宿内藤町遺跡に見る江戸のやきものと暮らし  |
| 落川・一の宮遺跡(日野3・2<br>・7号線)調査会 | 落川・一の宮遺跡調査略報Ⅰ -1991年・92年の調査-   |
| 都営川越道住宅遺跡調査会               | 武蔵台東遺跡発掘調査概報3 武蔵国分尼寺北方地区   |
| (株)大巧社                     | 継体大王と振媛 -越国の物語-  |
| 落越遺跡調査団                    | 東京都 八王子市 落越遺跡Ⅰ、東京都 八王子市 落越遺跡Ⅱ  |
| 東京国立文化財研究所                 | 東京国立文化財研究所概要 1993  |
| 日本考古学協会                    | 日本考古学年報(1991年度版)   |
| 玉川文化財研究所                   | 横浜市旭区蔵屋敷遺跡発掘調査報告書  |
| 鎌倉考古学研究所                   | 鎌倉市 平成3年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘<br>調査報告書 公方屋敷跡内やぐら、鎌倉市 平成3年度鎌倉市内<br>急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 No.342遺跡内や<br>ぐら |
| (財)古代学協会                   | 古代文化 第45巻第5号～第7号(通巻第414号)、古代学研究所<br>研究紀要 第3輯   |
| 史迹美術同致会                    | 史迹と美術 第63輯の5(第635号)  |
| 古代を考える會                    | 古代学評論 第3号  |
| 尼崎市立文化財収蔵庫                 | 尼崎市文化財調査報告 第24集 尼崎城跡Ⅰ(第1次発掘調査)、<br>尼崎市埋蔵文化財遺跡分布地図及び手引き   |
| (財)のじぎく文化財保護研究財<br>団       | 赤松町遺跡発掘調査報告書   |
| 六甲山麓遺跡調査会                  | 三田市 旧金剛寺跡とその周辺   |
| 朝鮮学会                       | 朝鮮学報 第147輯   |
| 考古学研究会                     | 考古学研究(第40巻第1号)通巻157号   |
| 博物館等建設推進九州会議               | 文明のクロスロード Museum Kyushu 第43号   |
| 京都府教育委員会                   | 埋蔵文化財発掘調査概報(1993)、埋蔵文化財発掘調査概報<br>(1993)、埋蔵文化財発掘調査概報(1993)  |
| 網野町教育委員会                   | 京都府網野町文化財調査報告 第7集 離山古墳・離湖古墳発掘<br>調査概要、京都府網野町文化財調査報告 第8集 浜詰遺跡発掘<br>調査概要                                 |
| 長岡京市教育委員会                  | 長岡京市文化財調査報告書 第31冊  |
| 城陽市教育委員会                   | 城陽市埋蔵文化財調査報告書 第23集   |

八幡市教育委員会

京都国立博物館

京都市歴史資料館

京都府立山城郷土資料館

亀岡市文化資料館

綾部市資料館

(財)泉屋博古館

京都大学文学部

花園大学考古学研究室

京都市文化観光局

福知山史談会

精華町の自然と歴史を学ぶ会

美山町役場

梶 國男

平口哲夫

安田博幸

遊佐和敏

八幡市埋蔵文化財発掘調査概報 第12集 内里五丁遺跡発掘調査概報

平成3年度 京都国立博物館年報

企画展 京都市の文化財 新指定の美術工芸品

企画展 城州一心講とオンマカブロー村のくらしと風呂ー、開館十周年記念特別展 宮座とまつり、京都の歴史 山城編

第15回企画展展示会図録 稲の民俗学、第16回企画展 展示図録「南丹波の王ー前方後円墳の世界ー」

第1回特別展示 木簡の旅ー高津発長屋王邸ー

泉屋博古館紀要 第9巻

紫金山古墳と石山古墳

展示シリーズ1 開学120周年記念「キャンパス」を掘る

京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度、栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成4年度、平安京跡発掘調査概報 平成4年度、京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度

第四回福知山城薪能

波布理曾能 第10号 創刊10周年記念

茅葺村歴史の里 写真集

多摩考古 第21号～第23号

個体別分析による縄文時代イルカ捕獲活動の研究 平成4年度 科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書

和田山町の古墳ー竹田地区主要古墳の測量調査ー

東邦大学付属東邦高等学校東邦考古学研究会会誌 東邦考古 第17号

### 編集後記

冷夏でなにかと例年と異なる夏でしたが、9月を迎え情報49号が完成しましたので、お届けします。

本号では、昨年度の調査で特に成果のあった瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の抄報を中心に掲載しました。この遺跡は、これまでの調査で円墳と認識していたものが前方後円墳とわかったり、多くの成果をあげた遺跡として有名になりました。また、職員の研究成果として前号の続きや資料紹介も掲載でき、充実した号になりました。よろしく御味読下さい。

なお、本号もMacintosh用のソフトウェアのQuarkXpress 3.1Jを用いて編集しました。

(編集担当=土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第49号

平成5年9月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961 (代)